築館町文化財調査報告書第３集

伊治城跡

—平成元年度発掘調査概報—

平成２年３月

築館町教育委員会

築館町文化財調査報告書第３集

伊治城跡

—平成元年度発掘調査概報—

平成２年３月

築館町教育委員会

序　　言

伊治城が築館町城生野に擬定されてから大分久しくなります。とくに宝亀の乱は国政を動かす大事件であり，その後の政府と土着人との約30年に亘る抗争の発端となるものでありましたことは周知の事であります。

当教育委員会は昭和62年以来城生野地区の発掘調査を進めてその解明につとめてまいりました。

昨年度の調査で二重の溝が確認された結果，本年度の調査において建物跡の存在を期待していましたが，予測どおりに5棟の建物跡が検出され，いずれも古代のものであることが確認されました。これを手がかりに今後の調査が伊治城の解明に大きく前進することが期待されます。

この調査に当って指導協力をいただきました文化庁・県文化財保護課・多賀城跡調査研究所・東北歴史資料館及び地元の方々に心から感謝を申し上げ，さらに今後のご指導ご協力をお願い申し上げます。

平成2年3月

築館町教育委員会教育長

千　葉　與一郎

例　　言

1．本書は，宮城県栗原郡築館町に所在する伊治城跡の平成元年度発掘調査概報である。

2．本書には，下記の調査成果を収録した。

調査次数	調　査　期　間	調査面積	内　　容
第10次調査	平成元年４月11日～６月１日	480 ㎡	宅地現状変更に伴う事前調査(国庫補助)
第11次調査	平成元年７月21日～11月22日	1,200 ㎡	国庫補助事業計画にもとづく調査
第12次調査	平成元年９月５日～９月16日	1,700 ㎡	通学路整備事業に伴う事前調査
第13次調査	平成元年10月16日～11月10日	1,960 ㎡	農道整備事業に伴う事前調査
第14次調査	平成元年11月29日～12月８日	170 ㎡	水道管埋設に伴う立合調査

3．図版の作成ならびに本書の執筆・編集は，築館町教育委員会社会教育課文化財保護係主事菅原祥夫が担当した。

4．遺物整理作業には，臨時職員若生志津子・氏家順子の協力を得た。

5．地区割は，城生野公民館前の任意の点を発掘基準点として定め，この点を原点（0.0)とする直角座標を組んで割り出している。発掘基準線の南北軸は，Ｎ２°－08'－08"Ｗ(Ｎは第Ｘ系座標北)である。

6．第４図に掲載した地形図は，建設省国土地理院発行の$\frac{1}{25,000}$の地形図を複製して使用した。

7．遺構略号は次のとおりで，各遺構ごとに番号を付した。

ＳＡ：柱列跡　　ＳＢ：建物跡　　ＳＥ：井　戸　　ＳＸ：その他の遺構

ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＫ：土　壙　　ＳＤ：溝

8．遺物略号は次のとおりで，各遺物ごとに番号を付した。

Ａ：縄文土器　　Ｂ：弥生土器　　Ｃ：土師器(ロクロ使用)

Ｄ：土師器(ロクロ不使用)　　Ｅ：須恵器　　Ｆ：丸瓦・軒丸瓦

Ｇ：平瓦・軒平瓦　　Ｋ：石製品　　Ｎ：金属製品　　Ｓ：硯

9．土層の色調は，『新版標準土色帳』（小山・竹原：1970）の基準にしたがって註記した。

10．調査成果の一部は，既に現地説明会や第16回古代城柵官衙遺跡検討会で公表しているが，本書の内容はこれらに優先するものである。

11．調査によって得られた出土遺物，ならびに調査の記録・図面類は，築館町教育委員会で一括して保管している。

調　査　要　項

1．遺 跡 名　伊治城跡（宮城県遺跡登載番号：41007）

2．所 在 地　宮城県栗原郡築館町字城生野

3．調査主体　築館町教育委員会（教育長　千葉與一郎）

4．調査担当　築館町教育委員会 社会教育課

5．調 査 員　宮城県教育庁文化財保護課　主査　手塚均

技師　菊地逸夫，伊藤裕，加藤明弘，岩見和泰，大和幸生

築館町教育委員会社会教育課　主事　菅原祥夫

6．調査協力　新井武郎，千葉けさよ(地主)，白鳥測量設計事務所，伊藤建設

7．調査参加者　千葉　力雄，千葉　寿見，千葉　春治，高橋　佐一，加藤　すえ，菅原　光男，菅原　永松，桑島　雪夫，伊藤　耕二，高橋　俊一，佐藤千喜男，佐藤　喜作，狩野　養治，小野　勘一，尾形　忠市，三塚　正道，白鳥　保守，佐藤　昭夫，

8．調査・報告書作成指導・協力　宮城県教育庁文化財保護課，東北歴史資料館，宮城県多賀城跡調査研究所，進藤秋輝，白鳥良一，真山悟(宮城県教育庁文化財保護課)，桑原滋郎(宮城県多賀城跡調査研究所)，藤沼邦彦，加藤道男，山田晃弘(東北歴史資料館)，八木光則(盛岡市教育委員会)，工藤雅樹(福島大学文学部)，小松正夫(秋田城跡調査事務所)，河原純之(文化庁記念物課)，金野正(宮城県文化財保護地区指導員)

目　　次

序　　言

例　　言

調 査 要 項

Ⅰ　遺跡の概要とこれまでの調査成果…… 1

Ⅱ　遺跡の位置と現状…… 2

Ⅲ　周辺の遺跡…… 3

Ⅳ　伊治城および栗原郡に関する古代史年表…… 8

Ⅴ　発見された遺構と遺物……14

第10次調査……14

第11次調査…… 15

第12次調査…… 35

第13次調査…… 37

第14次調査…… 49

Ⅵ　考　察…… 50

1．各遺構の特徴と問題点…… 50

2．まとめ…… 55

参考引用文献…… 56

写真図版…… 57

Ⅰ　遺跡の概要とこれまでの調査成果

伊治城は律令政府が神護景雲元年（767）に陸奥国経営の一環として，現在の宮城県北の内陸部にあたる栗原地方に設置した城柵である。文献には延暦15年（796）までの約30年間，この城柵に関する記録が登場する(Ⅳ参照)。なかでもこの地域の首長であった伊治呰麻呂が，宝亀11年（780）にこの城柵で按擦使紀広純を殺害し，さらに国府多賀城に攻め入って府庫の物を収奪・放火した事件は当時の政府に大きな衝撃を与えた。

この伊治城跡の所在地については，本遺跡がその最も有力な擬定地とされ，様々な検討が加えられてきた。なかでも宮城県多賀城跡調査研究所による発掘調査は，本遺跡の年代観や構造を知る上で多大な成果をあげている(宮城県多賀城跡調査研究所：1978～1980.3)。この調査では，北辺の外部施設が土塁と大溝で構成されていること，また当時遺跡内には多数の竪穴住居跡が営まれたことが明らかとなった。さらに「城厨」と墨書された土器が出土したことから，この一帯に城にかかわる厨の施設が存在していたことが明らかとなった。しかし，政庁跡や官衙ブロックなど城柵の主要な箇所が未発見で，この遺跡を伊治城跡と確定するための決め手を欠いていた。

ところで近年，本遺跡の所在する城生野地区一帯には開発の波が押し寄せ，徐々にではあるが発掘可能な土地が狭められている。このため，本遺跡が伊治城跡であることを一刻も早く確定し，具体的な保存対策を構ずる必要性が生じてきた。そこで築館町では関係諸機関の指導をあおぎ，昭和62年度から５ヶ年計画で発掘調査を実施している。

本年度は昨年度の調査で検出されていた区画溝のひろがりと，その内部に配置された遺構群の解明を目的として調査を実施した。その結果，整然と建ち並ぶ５棟の建物跡が検出され，この一帯が計画的に建物群が配置され，その周囲を二重の溝で方形に区画していた一画であることが明らかとなった。この成果からこの場所は伊治城跡のなかでもきわめて重要な一画とみられ，その性格としては政庁跡の可能性もある。築館町では今後この一帯を集中的に調査し，具体的な内容を明らかにして行きたいと考えている。

年　　度	町　負　担	県　負　担	国　負　担	総　　額
昭 和 62 年 度	５０万円	５０万円	１００万円	２００万円
昭 和 63 年 度	１００万円	１００万円	２００万円	４００万円
平 成 元 年 度	１２５万円	１００万円	２２５万円	４５０万円

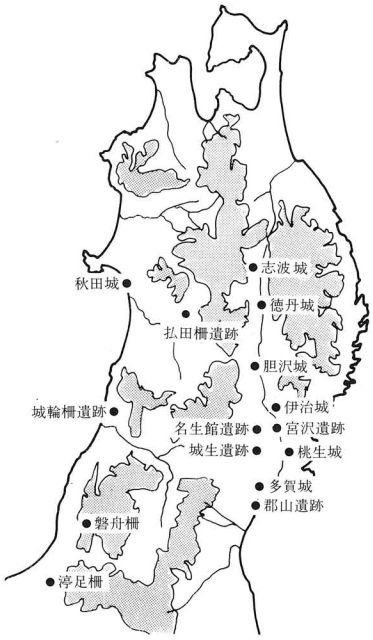
II　遺跡の位置と現状

本遺跡は宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は多賀城跡の北約52kmの位置にあり，多賀城と胆沢城を結ぶほぼ中間地点にあたっている。

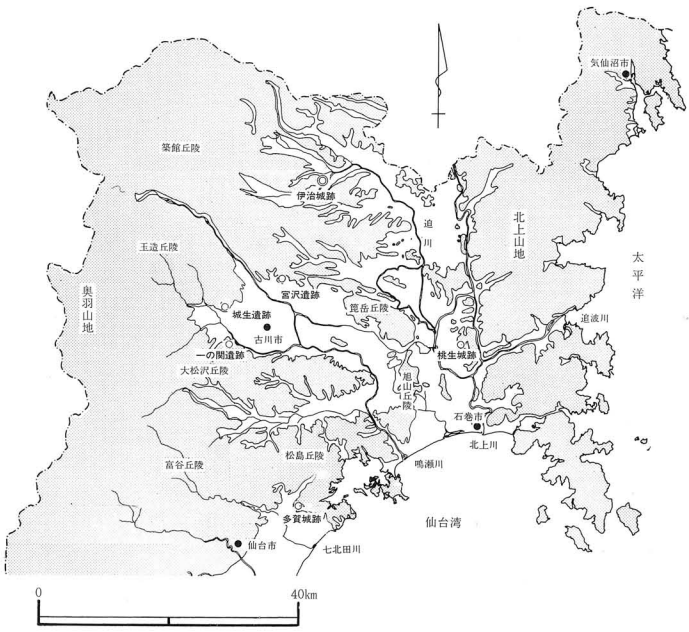
宮城県北部の地形をみると，中央部に北上川が流れ，その西側には奥羽山地が南北に大きくよこたわっている。この奥羽山地は山麓部で多数の河川によって開析され，いくつかの小丘陵に分岐している。本遺跡はその最も北に発達した築館丘陵の末端部と接する河岸段丘上に立地する。

この段丘は周囲を河川，丘陵末端部，さらに小さな谷で画され，独立した地形をなしている。本遺跡の範囲はこの段丘のほぼ全域と推定される。その規模は，東西が約700ｍ，南北は，南辺の位置を唐崎地区と地蔵堂地区を画する沢のあたりと考えれば，約650ｍ，一迫川と国道4号線が接するあたりと考えれば，約900ｍとなる。上面には黄褐色の火山灰層が厚く堆積し，縁辺には周囲との比高差が約6ｍほどある段丘崖が各所で認められる。現状は，100戸を越える住宅が点在し，それ以外の箇所は，主に水田・畑地として利用されている。

現在残っている遺構としては，台地北斜面に東西にのびる空堀状の大溝があり，さらにその北には，これに接してはしる土塁状のわずかな高まりがある。これらは古代において，伊治城の外郭線を構成していたことが宮城県多賀城跡調査研究所の発掘調査（宮多研：1978.3）によ



第１図　東北地方の主要な城柵

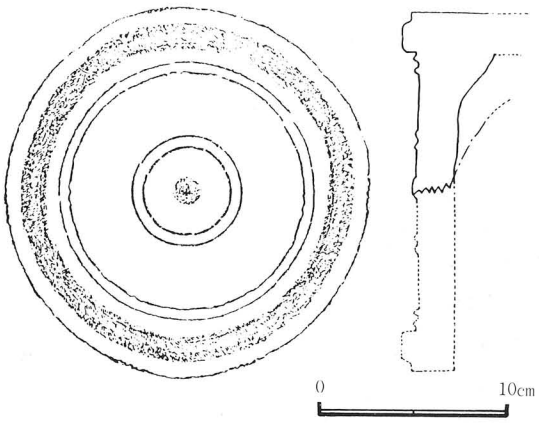


第２図　宮城県北部の地形と古代城柵・官衙遺跡

って確められている。また地元住民の話によると，かつては台地西斜面においてもこれと同じ遺構が残っていたらしい。しかしながら，開田と鹿島堰の改修のために旧地形は失われ，現在その所在を確認することはまったくできない。

遺物の散布は台地上のほぼ全面にわたって認められる。その多くは須恵器と土師器が占めており，このなかでも須恵器の量は圧倒的に多い。また，瓦の分布も唐崎地区を中心にわずかながらも認められる。

ところで昭和40年代の前半に，この台地の各所では大規模な開田工事が行われその際には多量の遺物が出土した。照明寺の住職であった故松森明心氏が精力的に収集したこれらの遺物は，現在，町指定文化財として一括して保管されている(築館町文化財保護委員会1969・1970.3)。広大な面積のうちまだごくわずかの調査しか終了していない現在，遺跡全体の概要を知る上で，これらは貴重な資料となっている。さて，それによれば，この台地一帯から出土した遺物は，そのほとんどが８世紀末を中心とした１時期のものに集中している。このことは，これまでの発掘調査（宮多研：1977～1979.3）で発見された多数の住居跡の年代観と一致しており，伊治城の存続期間を考える上で興味深い。また，この松森氏収集の遺物のなかには重圏文軒丸瓦がある（第３図)。これは多賀城第Ⅱ期（８世紀中頃～780)の所用瓦と同一の文様意匠である。



第３図　松森氏採集重圏文軒丸瓦

Ⅲ　周　辺　の　遺　跡

本遺跡の周辺には，年代的に近接する奈良・平安時代の遺跡が多い。そのいくつかは，既に圃場整備事業，東北自動車道の建設などに伴って発掘調査されている。これらの遺跡は，本遺跡と直接あるいは関接的に関連すると思われるので，ここでは，その主なものについて紹介しておきたい。

糠塚遺跡は，本遺跡の東約4.5kmの舌状台地上にある。約6,000㎡の調査が行われ，奈良・平安時代の住居跡が30棟検出された。奈良時代の住居跡から出土した土器は，宮城県北地方における国分寺下層式の基準資料となり得るものである（小井川・手塚：1978.3)。

山の上遺跡は，本遺跡の南約２.５kmにある。前述の糠塚遺跡と同じ奈良時代（国分寺下層式

期）の住居跡が３棟検出された（手塚：1980.3)。

また，本遺跡の東約４kmにある大門遺跡でも，奈良時代の住居跡が１棟，それに平安時代の住居跡が１棟検出されている。

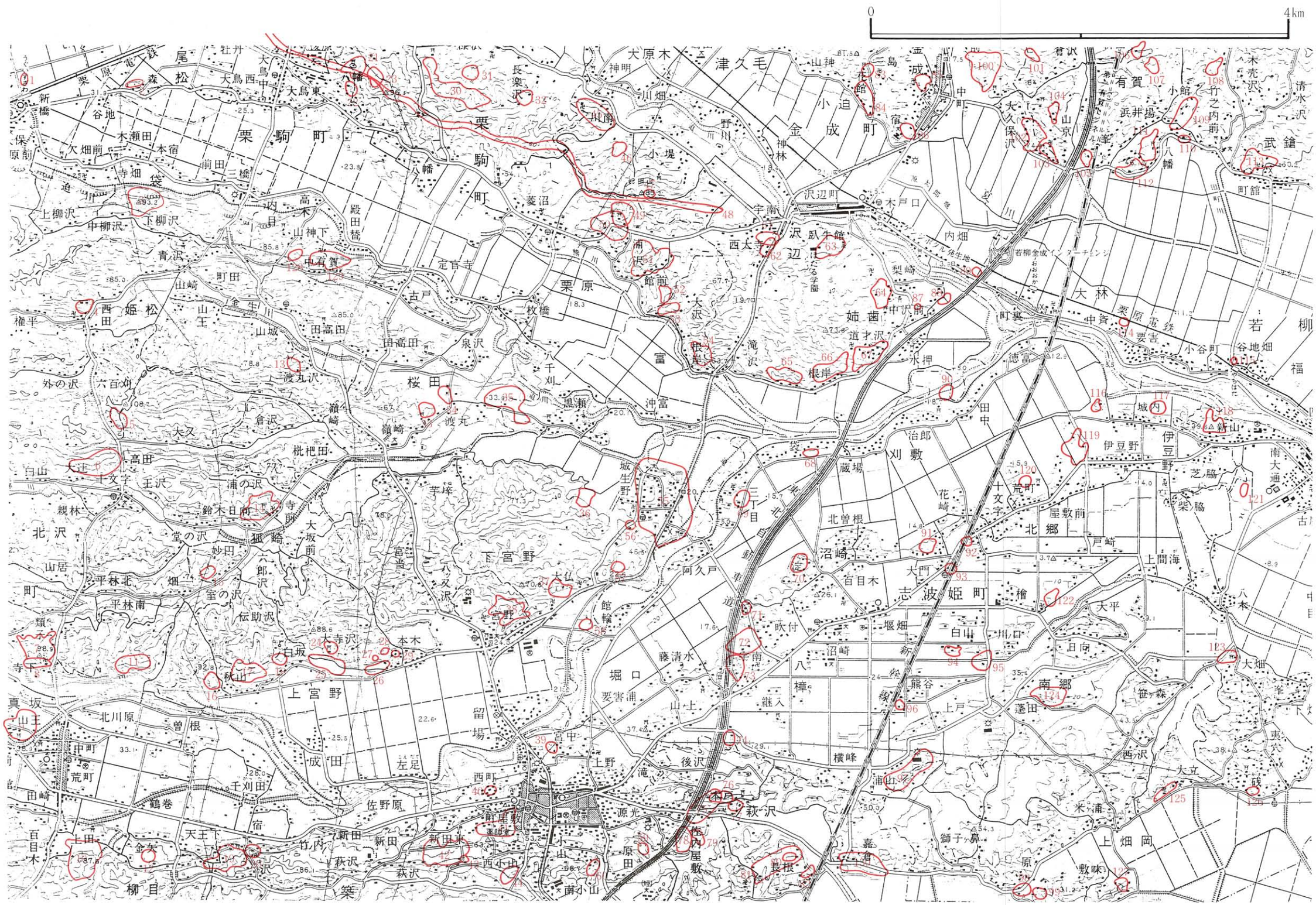
御駒堂遺跡は，本遺跡の南約２kmにある。調査の結果，41棟の住居跡が検出された。これらは出土土器の検討から，５群に大別され，それぞれ７世紀末ないし８世紀初め，８世紀前半，８世紀後半，９世紀初頭の年代が与えられている。この遺跡でとくに注目されるのは，８世紀前半の段階において，関東系の土器が使用され，また住居構造の点においても関東地方との関連が認められることである。このことについては，関東地方からの人間の移住が想定されており，また，その背景として政治的な意図がはたらいていたと予想されている（小井川・小川：1982.3)。栗原郡の建郡＝神護景雲元年（767）以前に，このような事実が存在していたことは東北地方における律令体制の浸透過程を考える上で，きわめて重要なことと言わねばならない。

また，発掘調査によるものではないが，本遺跡の東約４kmには，開田工事の際ヘラ切り無調整の須恵器坏等が出土した，狐塚遺跡がある。この遺跡は窯跡と考えられ，本遺跡に製品を供給した可能性がある（金野・佐藤：1976.3)。

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	25	白坂城跡	丘陵	城館	中世・近世
2	森館館跡（森猪城・稲瀬城）	分離兵陵	包含地	平安？	26	小館山横穴古墳群	丘陵斜面	包含地	奈良・平安
3	長楽寺々跡	丘陵	寺院跡		27	二ノ宮遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文
4	片子沢館跡	〃	包含地	中世	28	一ノ宮遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生(中)
5	鋳銭場跡	丘陵斜面	鋳銭場		29	本木遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文・弥生(中)
6	田中館跡	分離丘陵	城館	中世	30	県史跡 鳥矢ヶ崎古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳(後)奈良・平安
7	鹿島館跡（真坂城）	丘陵	城館	中世	31	猿飛来館跡	丘陵端	城館	中世
8	龍雲寺西沢古墳群	丘陵麓	横穴古墳	古墳(後)	32	長楽寺々跡	丘陵	寺院跡	
9	国史跡 山王囲遺跡	扇状地	包含地	縄文(晩)・弥生	33	中島遺跡	〃	包含地	平安
10	八幡原古墳跡	丘陵斜面	古墳	古墳	34	泉沢A遺跡	台地	包含地	奈良・平安
11	姫松館跡（姫松城）	丘陵端	城館	平安・中世	35	長者原遺跡	丘陵	集落跡	縄文(中)・奈良・平安
12	金矢遺跡	台地	包含地	縄文(晩)	36	掘切長根遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良
13	田高田館	丘陵	城館跡	中世	37	浦沢遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良
14	柿ノ木番所跡	谷底平野	番所跡		38	宮野館跡	丘陵	城館	中世
15	岩ノ目館跡（立野目城）	丘陵	城館	中世	39	西館遺跡	台地	包含地城館	弥生・中世
17	江坂城跡（郷坂城・上坂城）	〃	城館	中世・近代	40	青野遺跡	〃	包含地	奈良・平安
17	秋山城跡	〃	城館	中世・近代	41	薬師山北遺跡	丘陵斜面	包含地	古墳(前)
18	御弊所森古墳群（一本杉古墳・白坂古墳）	丘陵斜面	古墳	古墳(後)奈良・平安	42	築館城跡	丘陵	城館	中世・近世
19	柳目館跡	丘陵	包含地城館	弥生(後)・中生	43	丹下館下遺跡	台地	包含地	縄文
20	妙教寺遺跡	丘陵端	包含地	縄文	44	小山遺跡	〃	包含地	縄文
21	八幡館跡（宮々岡館）	丘陵頂	城館	中世	45	大原木館跡	丘陵	包含地城館	縄文・中世（鎌倉・室町）
22	八幡遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文	46	陣場遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文(中)
23	臥牛館跡（伏牛館）	丘陵	城館	(室町)	47	蛇田山空濠跡	丘陵頂	包含地	縄文・中世
24	毘沙門古墳群	丘陵斜面	円墳	古墳(後)奈良・平安	48	八幡土塁跡（伊治城外郭？）	丘陵斜面	土塁	

番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
49	栗原寺跡遺跡	丘陵斜面	包含地寺院跡	奈良・平安	90	刈敷治郎遺跡	河川敷	包含地	縄文(晩)・平安
50	尾松遺跡	丘陵斜面	包含地	奈良・平安	91	竹ノ内遺跡	台地	包含地	縄文
51	栗原館跡	丘陵	城館	中世	**92**	**大門遺跡**	〃	集落跡	奈良・平安・中世
52	新山神社跡遺跡	〃	包含地	縄文	93	〃 〃	〃	集落跡	奈良・平安・中世
53	大沢横穴古墳群	丘陵急崖斜面	横穴古墳	古墳(後)・奈良・平安	**94**	**狐塚遺跡**	〃	包含地	奈良・平安
54	富城跡（天神城跡）	丘陵	城館	中世・近世	95	〃 〃	〃	包含地	奈良・平安
55	**伊治城跡**	台地	城柵跡	奈良・平安	96	熊谷遺跡	〃	集落跡	縄文・古代
56	甚内屋敷遺跡	丘陵端	包含地	奈良	97	浦山館跡	丘陵		中世
57	大仏古墳群	丘陵斜面面	円墳	奈良・平安	98	平館跡	分離丘陵	城館	中世・近世
58	押切遺跡	自然堤防	包含地	縄文・弥生(中)	99	原貝塚	分離丘陵端	貝塚	縄文・(晩)
59	原田遺跡	丘陵	集落跡	縄文(中)・奈良・平安	100	金成館跡（金成東・南・西館）	丘陵	城館	中世（室町）
60	高田山遺跡	台地	包含地	縄文	101	倉沢遺跡	〃	包含地貝塚？	縄文
61	西館館跡	丘陵	城館	中世	102	鳥見城跡	〃	城館	近世
62	西大寺十三塚	〃	十三塚	縄文・中世（鎌倉・室町）	103	大久保遺跡	〃	包含地	奈良・平安
63	沢辺館跡（臥入館・東館）	丘陵	城館	中世	104	鶴ヶ城跡（御田鳥跡）	〃	城館	中世・近世
63	梨崎館跡	〃	城館	中世	105	有賀峯遺跡	丘陵中腹	集落跡	奈良・平安
65	姉歯横穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	古墳(後)	106	新山遺跡	丘陵	包含地	縄文
66	上館跡（古館・姉歯館跡）	丘陵	城館	平安(後)	107	軽石館跡	〃	城館	中世・近世
67	大梨館跡	〃	城館	中世	108	木売沢遺跡	丘陵麓	包含地	縄文(前)
68	刈敷袋遺跡	自然堤防	包含地	縄文	109	田子尾館跡（田子屋館）	丘陵	城館	中世・近世
69	刈敷館跡	自然堤防	城館	中世	110	藤貫沢遺跡	〃	包含地	縄文・奈良・平安
70	日良館跡	台地	城館	中世	111	八幡遺跡	〃	包含地	縄文（前・中）
71	鶴ノ丸遺跡	〃	城館	縄文(晩)～近世	112	斐野館跡（有賀城）	〃	城館	中世
72	宇南遺跡	〃	集落跡城館	縄文（前・晩）奈良・平安	113	武鎗館跡（東・西館）	〃	城館	中世
73	**御駒堂遺跡**	〃	包含地	古墳・奈良・平安・近世	114	大林館跡	自然堤防	城館	中世・近世
74	**山ノ上遺跡**	〃	包含地	奈良	115	福岡館跡	自然堤防	城館	中世・近世
75	木戸遺跡	〃	集落跡	縄文(中)・奈良平安	116	山王館跡	台地端	包含地城館	中世
76	鰻沢遺跡	〃	集落跡	縄文(中)・奈良平安	117	城内古墳	台地	古墳	古墳（後）
77	萩沢城跡	〃	城館	中世・近世	118	新井山館跡（若柳城）	分離丘陵	城館	中世・近世
78	横須賀貝塚	丘陵地	貝塚	縄文（晩）弥生（中・後）	**119**	**糠塚遺跡**	台地	集落跡	弥生・奈良・平安
79	木戸平沢遺跡	台地	包含地	縄文	120	荒町遺跡	〃	包含地	奈良・平安
80	照越台遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（中・晩）古墳・奈良・平安	121	柴の脇遺跡	沖積平野	包含地	縄文(晩)・奈良・平安
81	桝形遺跡	丘陵斜面	包含地	縄文（晩）	122	八幡館跡	自然堤防	包含地	縄文
82	玉荻台遺跡	台地	包含地	縄文（中・後・晩）	123	大畑貝塚	台地	貝塚	縄文（中・後）
83	小迫観音跡	丘陵斜面	寺院跡	中世（鎌倉）	124	蓬田館跡	丘陵	包含地城館	縄文・中世
84	西館館跡	丘陵	城館	中世（室町）	125	大立横穴古墳跡	丘陵麓	横穴古墳	古墳（後）・奈良
85	台畑遺跡	丘陵斜面	包含地窯跡	平安	126	夷穴古墳群	丘陵斜面	横穴古墳	縄文（後）
86	荒崎館跡	丘陵	城館	中世	127	敷味貝塚	分離丘陵端	貝塚	縄文（後・晩）
87	姉歯松古墳	〃	古墳		128	有賀沢遺跡	丘陵頂	包含地	縄文（晩）
88	佐野遺跡	〃	集落跡	奈良・平安	129	桜田館跡	〃	城館	中世
89	大林遺跡	自然堤防	包含地	平安	130	嘉倉貝塚	台地	貝塚	縄文（早・前）弥生（中・後）

第1表　遺跡地名表



第4図 伊治城跡および周辺の遺跡

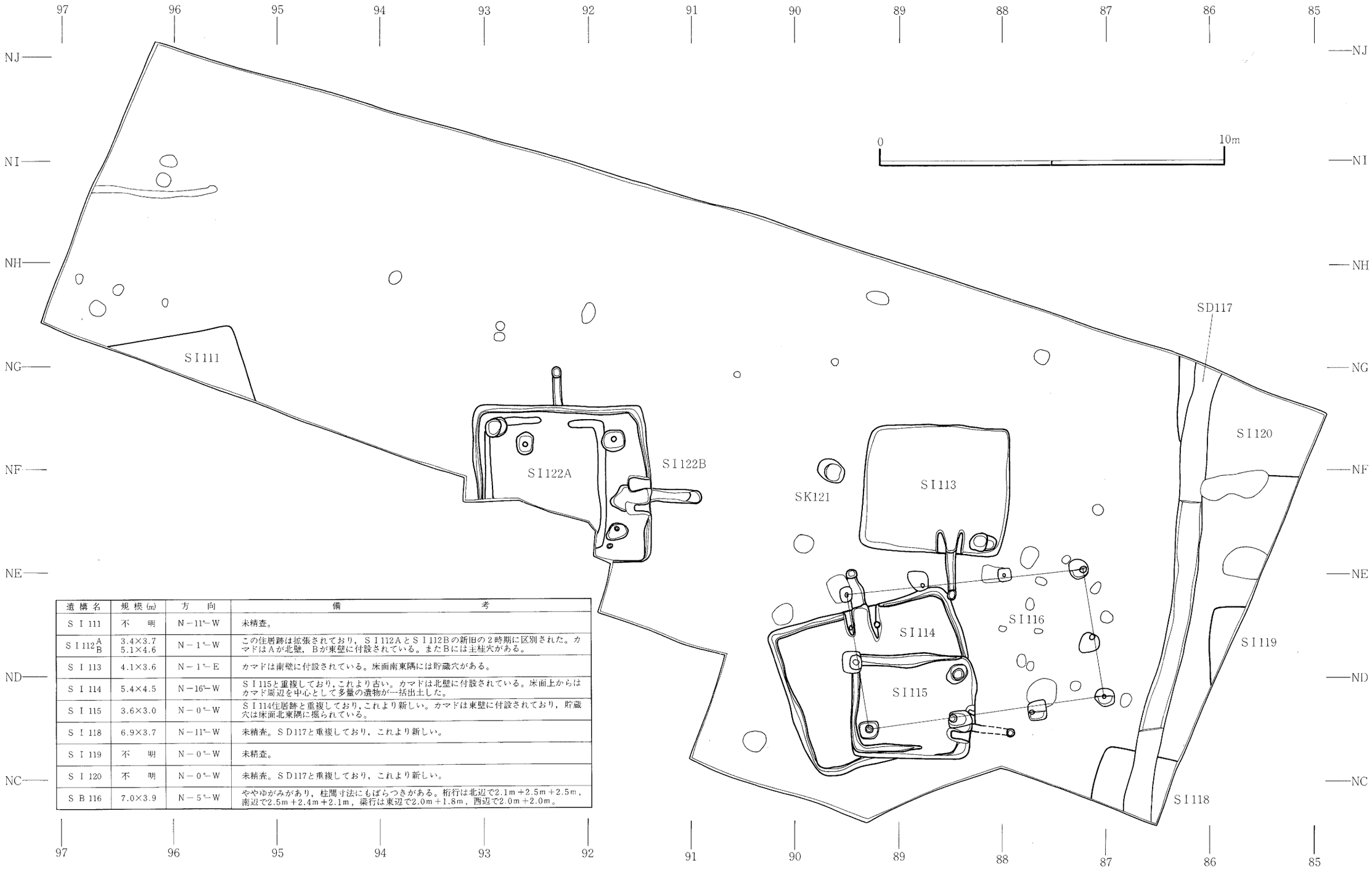
Ⅳ　伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲1	10．伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守将軍田中多太麻呂らに叙位，外従五位下道嶋三山は従五位上を賜う。	続日本紀
768	2	12．陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。	続日本紀
769	3	1．伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。	続日本記
		2．桃生・伊治に坂東8国の百姓を募り安置しようとする。	続日本紀
		6．栗原郡をおく。これはもと伊治城である。（「続日本紀」では神護景雲元年11月乙己条に収めるが錯簡とみられここでは神護景雲3年6月9日乙己説をとる）	続日本紀
		6．浮宕の百姓2,500人を伊治城に遷す。	続日本紀
780	宝亀11	3．上治郡大領伊治公呰麻呂は牡鹿郡の大領道嶋大楯按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで多賀城にせまり府庫の物をとり放火する。	続日本紀
792	延暦11	1．斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘にさまたげられて果せないでいることを訴える。	類聚国史巻190
796	15	11．伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。	日本後紀
		11．相模・武蔵・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀
804	23	11．栗原郡に3駅をおく。	日本後紀

西暦	和暦	記事	文献
837	承和 4	4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動揺し，栗原・賀美両郡の百姓多く逃亡する。また栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	続日本後紀
905	延喜 5 （着手）	延喜式 ○神名式　陸奥国100座 栗原郡7座　大1座　表刀神社 小6座　志波姫神社（名大神） 雄鋭神社 駒形根神社　和我神社 香取御児神社 ○民部式　東山道・陸奥国大国 ……志太，栗原，磐井…… ○兵部式　陸奥国駅馬 ……玉造，栗原，磐井……各5疋	延喜式
931～938	承平年間	和名類聚抄　陸奥国 栗原郡（久利波良） （郷名）栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄
1062	康平 5	8. 前9年の役で源頼義軍は，栗原郡営岡に到り，清原武則軍と合う。軍を編成し磐井郡中山に赴く。	陸奥話記
1189	文治 5	8.7　文治の役で源頼朝の奥羽攻めに対し，藤原泰衡自身は，国分原鞭楯（仙台市）に陣し，その後方栗原・三迫・黒岩口・一野辺には，若九郎大夫らを大将軍となし数兵の勇士を差しむけた。	吾妻鏡
		8.21　頼朝軍は暴風雨をついて途中栗原・三迫などの要害による平泉方の抵抗を排しつつ松山道より津久毛橋に到る。	吾妻鏡
1190	建久 1	2.12　頼朝の征東に最後まで抵抗する大河次郎兼任と頼朝方の軍士，在国御家人らとが栗原の一迫で戦う。	吾妻鏡
		3.10　栗原寺に逃げのびた兼任が樵夫らに殺害される。	吾妻鏡

伊治城跡推定地地形図

第5図　調　査　区　位　置　図



遺構名	規模(m)	方向	備考
SI111	不明	N－11°－W	未精査。
SI112 A/B	3.4×3.7 5.1×4.6	N－1°－W	この住居跡は拡張されており，SI112AとSI112Bの新旧の2時期に区別された。カマドはAが北壁，Bが東壁に付設されている。またBには主柱穴がある。
SI113	4.1×3.6	N－1°－E	カマドは南壁に付設されている。床面南東隅には貯蔵穴がある。
SI114	5.4×4.5	N－16°－W	SI115と重複しており，これより古い。カマドは北壁に付設されている。床面上からはカマド周辺を中心として多量の遺物が一括出土した。
SI115	3.6×3.0	N－0°－W	SI114住居跡と重複しており，これより新しい。カマドは東壁に付設されており，貯蔵穴は床面北東隅に掘られている。
SI118	6.9×3.7	N－11°－W	未精査。SD117と重複しており，これより新しい。
SI119	不明	N－0°－W	未精査。
SI120	不明	N－0°－W	未精査。SD117と重複しており，これより新しい。
SB116	7.0×3.9	N－5°－W	ややゆがみがあり，柱間寸法にもばらつきがある。桁行は北辺で2.1m＋2.5m＋2.5m，南辺で2.5m＋2.4m＋2.1m，梁行は東辺で2.0m＋1.8m，西辺で2.0m＋2.0m。

第6図　第10次調査区遺構配置図

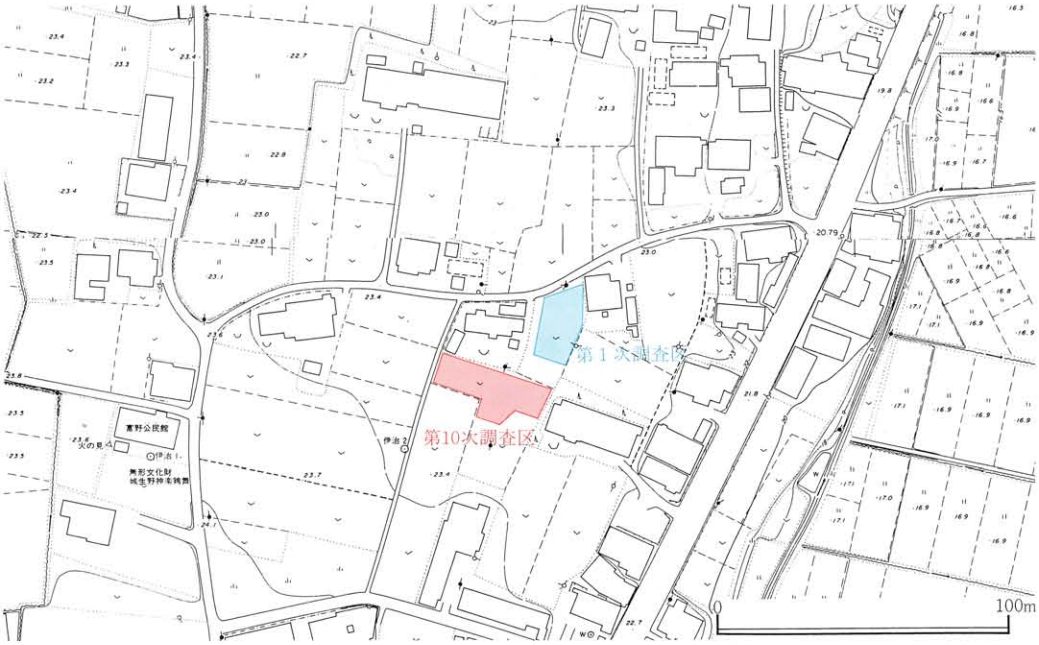
V　発見された遺構と遺物

第 10 次 調 査

調査地　城生野唐崎

面　積　480㎡

期　間　平成元年４月11日～６月１日



第７図　第10次調査区位置図

本調査は，二階堂允康氏の宅地現状変更に伴う事前調査である。

この調査区は，北東側の隣接地が当教育委員会によって既に発掘調査されており，その結果，伊治城跡にかかわる５棟の竪穴住居跡が発見されている(築館町教育委員会1988.3)。

このため，現状変更の予定地内には多数の遺構の存在が予想された。そこで調査の方法は対象域の全面を調査する方針をとり，４月11日から作業を開始した。

その結果，調査区内からは竪穴住居跡８棟（ＳＩ111～115，118～120）のほか，掘立柱建物跡（ＳＢ116)，土器埋設土壙１基（ＳＫ121)，溝１条が検出された。

このうちSB116建物跡は，規模が小さく，重複する３棟の住居跡をすべて切っていること，また群をなす様子がみられないことなどから，伊治城の官衙域を構成するものではないと思われる。

なお，今回は略報に留め，成果の詳細は次回に譲ることにしたい。

第 11 次 調 査

調査地　城生野唐崎

面　積　780㎡

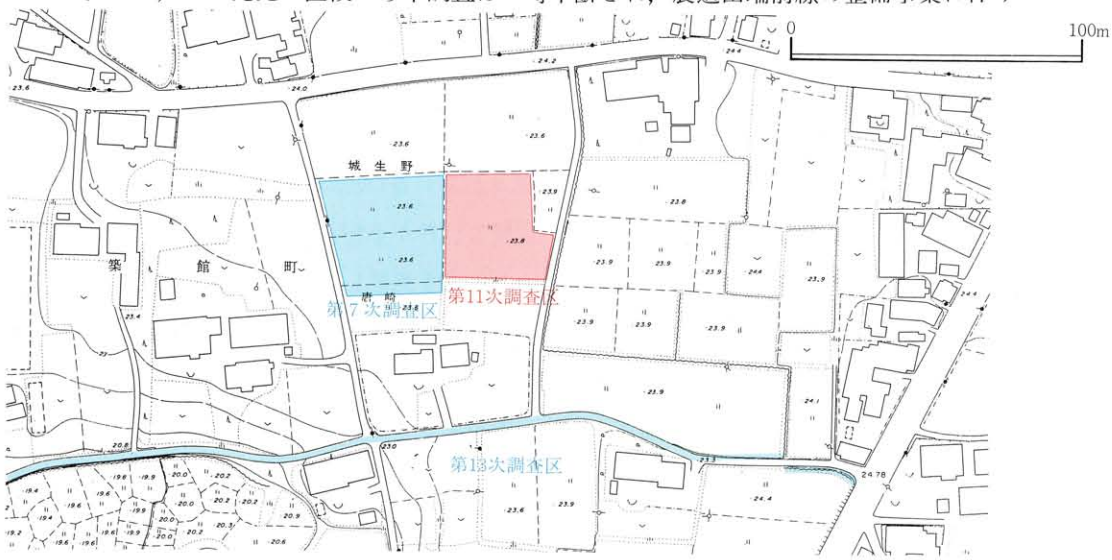
期　間　平成元年７月21日～11月22日

昭和62年度から開始した当教育委員会による発掘調査は，これまで未発見であった政庁跡あるいは官衙ブロックなど城柵の主要な箇所の解明を最大の目的としている。この事業の２年次にあたる昨年度は，城生野地区のやや南寄りに設定した第７次調査で，大規模な２条の区画溝（ＳＤ103・ＳＤ104）を発見した(築館町教育委員会：1989.3)。なかでもＳＤ103溝は，調査区内で北西のコーナーが検出され，東側と南側へむかって「Ｌ」字状に延びている状況が確認されたことから，本年度はこの東側に調査区を設定し，区画溝の内部に配置された遺構群の解明に主眼をおいて，７月６日から調査を開始した。

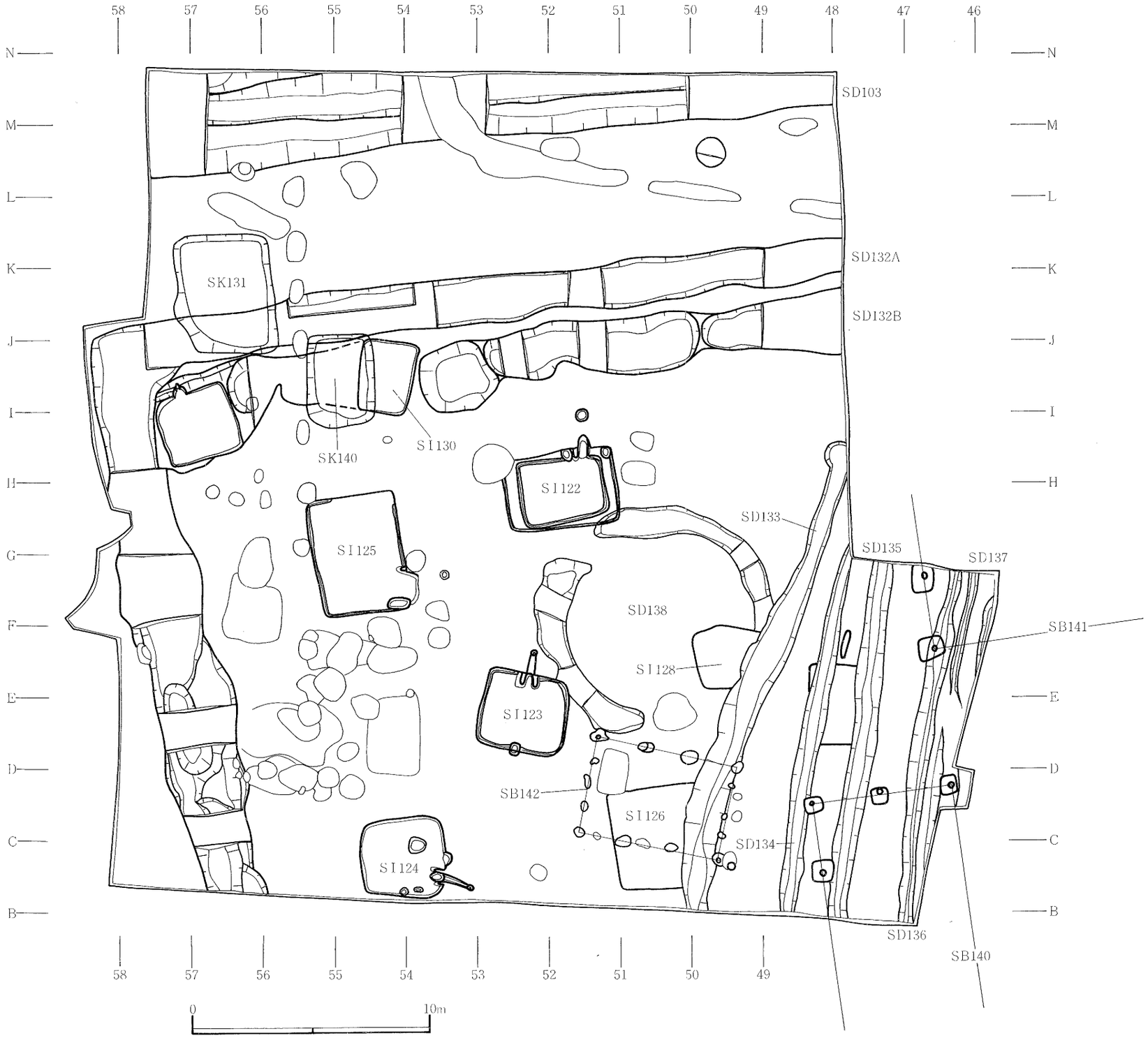
その結果，ＳＤ103溝の内側にＳＤ132溝があらたに検出され，まずこの区画施設が二重構造であることが判明した。そしてさらに調査を続けたところ，区画の内側からは９棟の竪穴住居跡が発見され，９月30日に現地説明会を開催して，その成果を一般に公表した。

ところがその後，調査状況には大きな変化がおきた。

まずはじめに，湧水のためこれまで遺構確認作業の不十分であった調査区南東隅で，大規模な２棟の建物跡が相次いで発見された(ＳＢ140・ＳＢ141)。これらは，その一部が確認されたのみではあるが，柱穴の並びから柱筋をそろえた南北棟（ＳＢ140）と東西棟（ＳＢ141）と推定された。また，この発見の直後から本調査は一時中断され，農道田端前線の整備事業に伴う



第８図　第11次調査区位置図



第９図　第11次調査遺構配置図

調査に入ったが，ここでもさらに3棟の建物跡が相次いで発見された(本書)。しかもこのうちの1棟（ＳＢ150）は，本調査区で発見されていた2棟の建物跡と柱筋がほぼそろっており，またその他の2棟もほぼ同一の建物方向に設計されているのが確認された。こういった状況から，この一帯は二重の溝で広範囲に区画され，内部に大規模な建物群が計画的に配置された一画であることが，明らかとなった。

この画期的な発見に当教育委員会では，県教育庁文化財保護課との連絡を図って調査体制の充実を行うと共に，11月20日には現地説明会を再度開催して，この成果の公表を行った。また11月26日には，文化庁記念物課河原純之主任技官の現地視察を受け，今後の保護対策の方針について適切な御指導をいただいた。

調査は11月23日までに実測・補足調査を終了し，11月24日には埋め戻しを行って一切の作業を終了した。

以下では，遺構を中心に記述して行く。

① 建　物　跡

建物跡は3棟発見された（ＳＢ140～142)。このうちＳＢ140建物跡とＳＢ141建物跡は，二重の区画溝（ＳＤ103・ＳＤ132）の内部に計画的に配置された建物跡である。一方，ＳＢ142建物跡は竪穴住居跡（ＳＩ126）を切っており，前述の2棟とは建物方向が違う。また、規模の点でも大きく異っており，これらより新しい時期のものと推定される。

SB140建物跡

梁行2間の南北棟と推定され，調査区の南側へのびている。この建物跡は，東桁行の柱筋を後述するＳＢ141建物跡の西梁行にほぼそろえている。建て替えの痕跡は認められない。

柱穴は0.7m～1.1mの方形をなし，径20cm～34cmの柱痕跡が認められる。柱間寸法は，西桁行が2.86m，北梁行が西から2.82m＋3.06m（総長5.88m）を計測する。

断割り調査は，建物北西隅のP_2で実施した。遺存状況は，確認面から40cmの深さまで残っており，掘り方埋土は，地山ブロックを主体とする互層である。

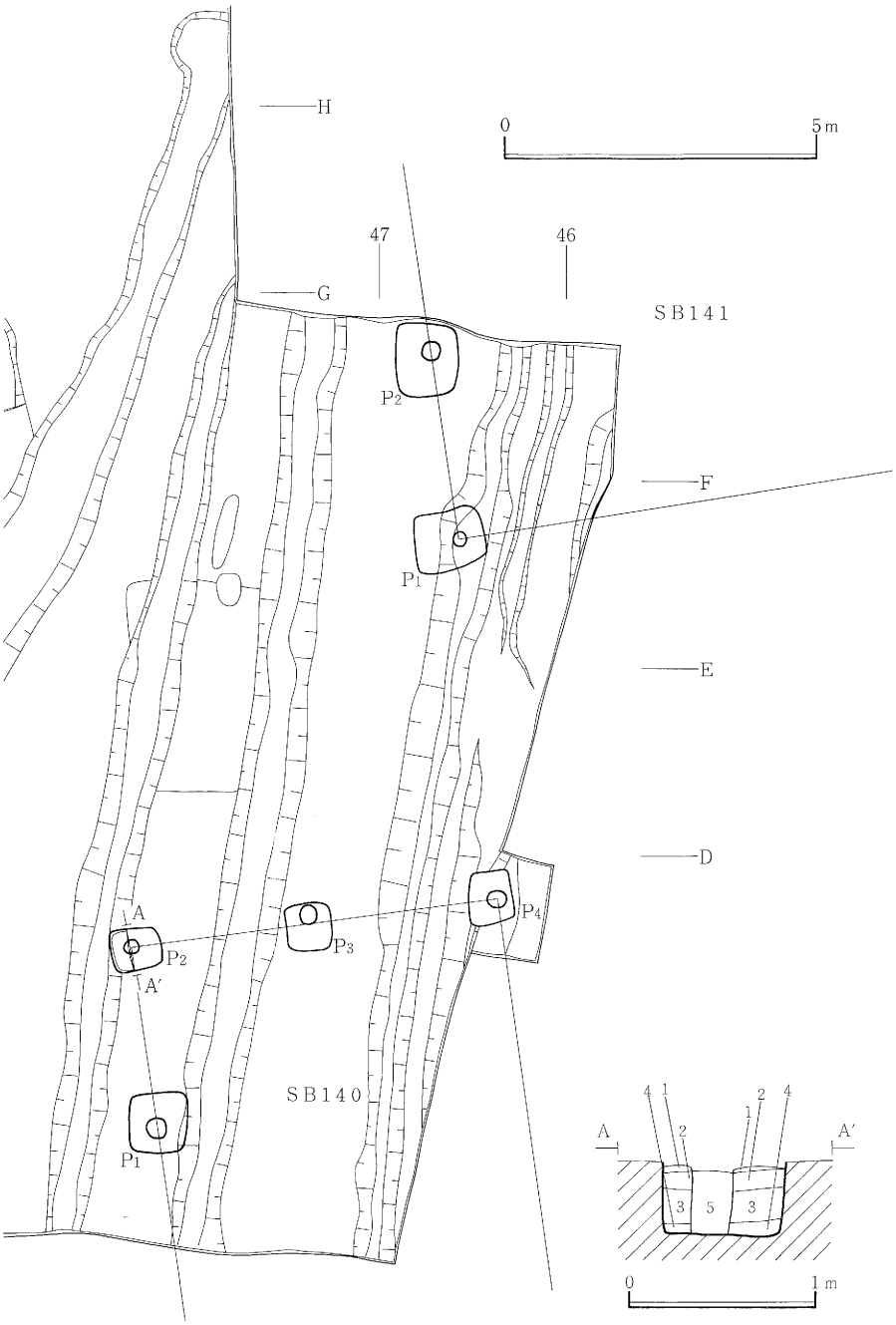
遺物は出土していない。

SB141建物跡

ＳＢ140建物跡東桁行の北延長線上で，2個の柱穴が並んだ状態で検出された(P_1・P_2)。この建物跡は，P_1の南側と西側へ柱穴がそれ以上延びないこと，P_2の北側にＳＤ103・132区画溝が近接することから，P_1を南西隅とする東西棟と推定される。建て替えの痕跡は無い。

なお，この建物跡とＳＢ140建物跡との間隔は2.81mを計測し，おおよそ20尺にとれる。

柱穴は0.9m～1.2mの方形をなし，径24cm～30cmの柱痕跡が認められる。P_1－P_2間の柱間寸法は，3.08mを計測する。断割り調査は実施しておらず，出土遺物はない。



層位	層No	土　　色	土質	分布	備　　考
1	1	黒　褐　色(2.5Y 3/1)	シルト	掘り方	しまりがあり，かたい。
2	2	にぶい黄褐色(10YR 7/4)	シルト	埋　土	しまりがあり，かたい。
3	3	褐　灰　色(10YR 5/1)	シルト		しまりがあり，かたい。
4	4	灰黄褐色(10YR 5/2)	シルト		しまりがあり，かたい。
5	5	黒　褐　色(2.5Y 3/1)	シルト	柱痕跡	しまりがなく，やわらかい。

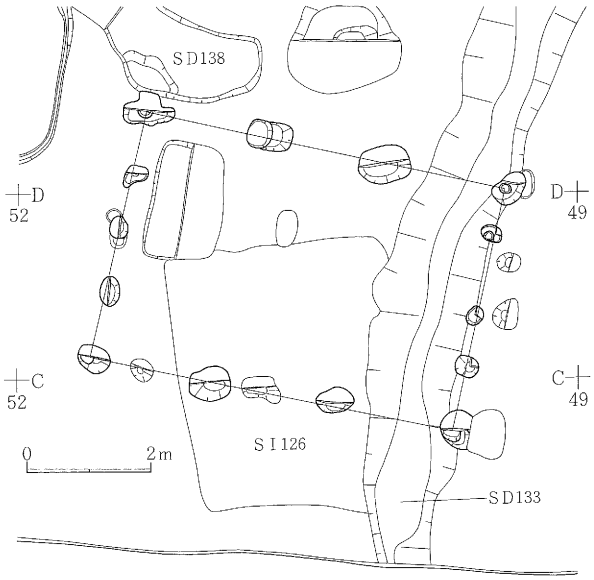
第10図　SB140・141建物跡

SB142建物跡

前述した2棟に較べてきわめて小規模な，4間×3間の東西棟である。建物方向は発掘基準に対し，南北方向で東へ大きく振れている。ＳＩ126住居跡，ＳＤ138円形周溝と重複しており，これらより新しい。またＳＤ133溝とも重複しているが，新旧関係は溝を掘りあげてから確認しているため，判然としない。

柱穴は不整形をなし，不明確なものもあるが抜き穴を伴う。柱の径は，あたり痕から10cm前後と推定される。

この建物跡に伴う遺物は，まったく出土していない。



第11図　SB142建物跡

② 住　居　跡

住居跡は9棟発見された（ＳＩ122～130)。これらは検出状況から区画溝（ＳＤ103・ＳＤ132）の内側で検出された7棟（ＳＩ122～128）と，区画溝（ＳＤ132Ｂ）と重複する2棟（ＳＩ129・ＳＩ130）に大別される。方向は，発掘基準線に対し南北方向で西へやや振れるものが大半である。しかし，ＳＩ123・ＳＩ130住居跡の2棟だけは東へ振れており，他とは区別される。

以下では精査を実施した6棟の住居跡について記述する。

ＳＩ122住居跡

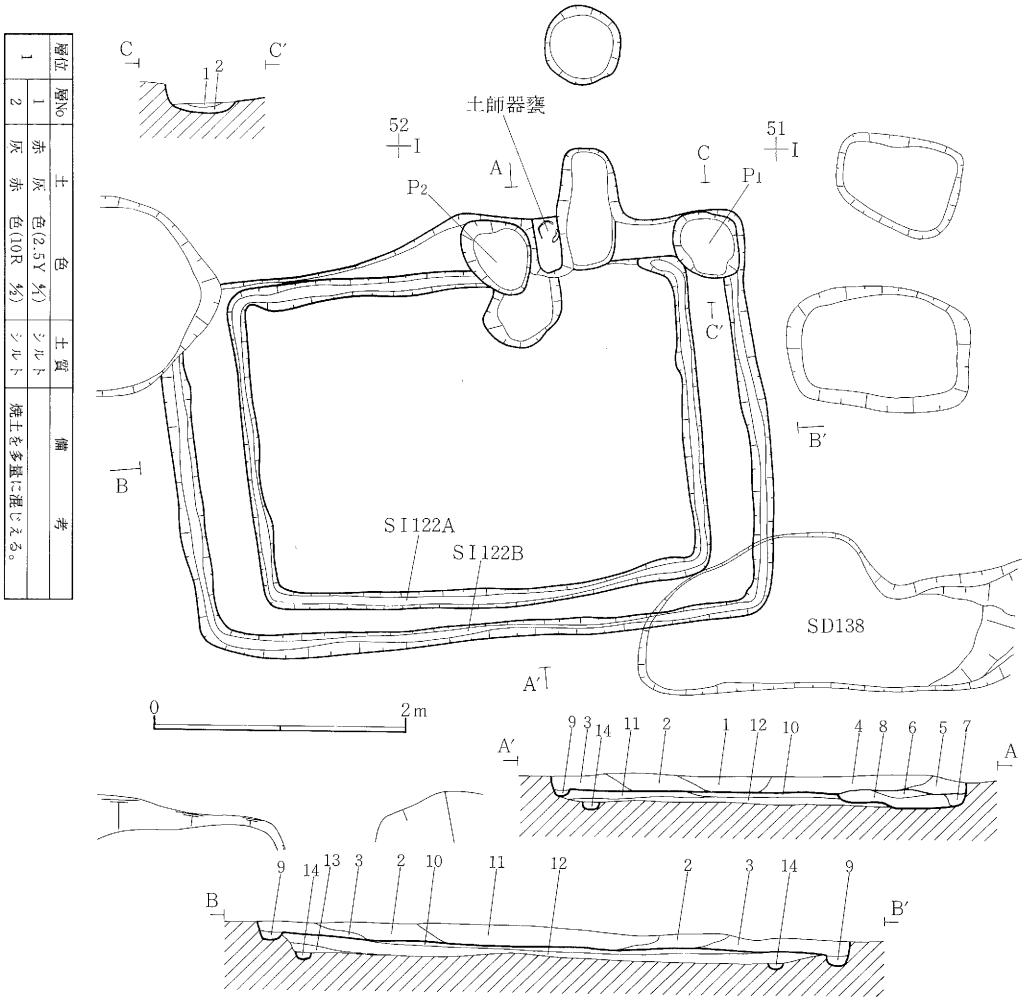
ＳＩ122住居跡は拡張現象が認められ，新旧の2時期に区別された。そこで古い段階の住居跡をＳＩ122Ａ，拡張後の新しい段階の住居跡をＳＩ122Ｂとし，両者を区別して説明する。

○ＳＩ122Ａ住居跡

この段階の住居跡は，その後の拡張に伴って床面下まで削平されており，検出されたのは周溝のみである。ただし，北壁ぎわの東寄りの位置で周溝が一部絶切れていることから，ここにカマドが付設されていた可能性がある。平面形は東西に長い長方形を呈する。規模は東西3.7m，南北2.7mである。住居跡の方向は，発掘基準線に対し南北方向で西へ7°振れている。
出土遺物は無い。

○ＳＩ122Ｂ住居跡

〔重複〕　ＳＤ138円形周溝と重複しており，これより新しい。また，北西隅は煙管の入る円



層位	層No	土色	土質	備考
1	1	赤灰色(2.5Y 4/1)	シルト	焼土を多量に混じえる。
2		赤色(10R 4/2)	シルト	

層位	層No	土色	土質	遺構	分布	備考
1	1	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト	SI122B	竪穴内	大粒の地山ブロックを不規則に混じえる。
2	2	暗褐色(10YR 3/3)	シルト			均質な層。
3	3	暗褐色(10YR 3/3)	シルト			均質な層。
4	4	黒褐色(10YR 3/2)	シルト			均質な層。
5	5	黒褐色(10YR 2/3)	シルト			やわらかくしまりがない。
6	6	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト		P_2	
	7	褐色(10YR 4/4)	シルト			焼土・地山ブロックを多量に混じえる。
	8	黒褐色(10YR 2/3)	シルト			やわらかく，しまりがない。下部に薄く焼土がひろがる。
7	9	黒褐色(10YR 2/3)	シルト		周溝内	
8	10	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト		竪穴掘り方	地山ブロックをまだらに混じえる。しまりがある。
	11	黒褐色(10YR 3/2)	シルト			混入物なし。しまりがある。
	12	褐色(7.5YR 4/3)	シルト			地山大粒を少量混じえる。
	13	黄橙色(10YR 8/6)	シルト			
9	14	にぶい黄褐色(10YR 5/3)	シルト	SI122A	周溝内	

第12図　SI122 住居跡

形の土壙に破壊されている。

〔平面形・規模〕　拡張は東西方向にひろく行れており，拡張後の規模は東西4.7m，南北2.9mである。平面形は，東西に細長い長方形をなすが，北辺はゆがみが大きい。

〔堆積土〕　竪穴内の堆積土は，5層に区別された。第1層はにぶい黄褐色のシルトで，大粒の地山ブロックを不規則に混じえている。これより下の層は混入物をほとんど含まない均質なシルトで，やわらかくしまりがない。色調は下層になるほど暗くなって行き，暗褐色から黒褐色に変化する。

〔壁〕　確認面から10cm前後の高さまで残存している。直立気味に立ち上がる。

〔床〕　床は，住居掘り方へ地山ブロックの多量に混じる4枚のシルト層を埋めることによってつくり出している。北半部の上面はしまっており，硬い。

〔カマド〕　ＳＩ122Ａの推定位置と同じ北壁の東寄りに付設されている。遺存状況は悪く，煙道は煙出しのピットに接続する付近が削平されてしまっている。また，燃焼部の東側壁も残存していない。残存していた西側壁は，土師器甕1個体を芯に用い，その周囲に黒褐色の粘土を貼ることによって構築している。

〔柱穴〕　検出されなかった。

〔周溝〕　北壁を除く各辺の壁沿いを巡っている。規模は幅7cm～8cm，深さ10cm～13cmである。断面形はＵ字形をなす。堆積土は黒褐色のシルトで，竪穴内の堆積土とは区別される。

〔ピット〕　貯蔵穴の可能性のあるピットが2基検出された（P_1・P_2）。堆積土中には焼土が充満している。

〔出土遺物〕　床面から土師器坏・甕，須恵器坏・高台付坏・甕が出土した。このうち須恵器坏は，ヘラ切り無調整の完形品を含んでいる。土師器の坏はロクロが使用された表杉ノ入式のもので，甕はロクロ使用・不使用のものが混在している。

ＳＩ123住居跡

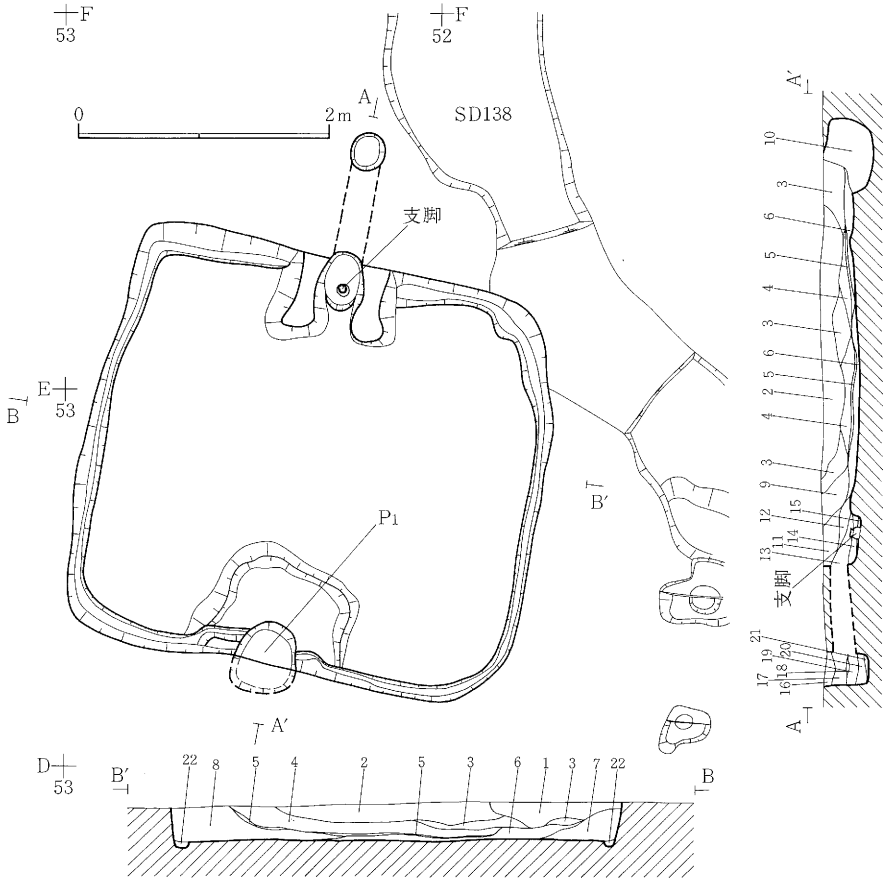
〔重複〕　ＳＤ138円形周溝と重複しており，これより新しい。

〔平面形・規模〕　東西3.6m，南北3.3mの方形をなす。北東隅はいくぶん丸味をもっている。

〔方向〕　発掘基準線に対し，南北方向で東へ11°振れている。

〔堆積土〕　竪穴内の堆積土は，5層に大別された。第1層と第2層は住居跡中央にレンズ状に堆積するシルトで，やわらかくしまりがない。第3層は，葦と思われる炭化した植物遺体を多量に混じえており，竪穴内の全域を2cm～5cmの厚さで覆っている。第2層との層理面からは，完形品を含む多量の遺物が一括して出土した。第4層は第3層の形成以前に床面上に堆積した層で，4cm～8cmの厚さがある。また，第5層は第3層の形成以前に壁ぎわに堆積した

層である。ところで，第3層は床面を直接覆うものではなく，また，この層の形成される以前に，壁ぎわでは既に土層の堆積がかなり進行している。しかも炭化した植物遺体には，上部構



層位	層No	土色	土質	分布	備考
1	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	竪穴内	均質。
	2	暗黄褐色(10YR4/2)	シルト		均質でしまりがない。
2	3	褐色(10YR4/4)	シルト		地山ブロックを霜降り状に混じえる。
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト		均質。
3	5	黒褐色(5YR2/2)	シルト		ほぼ全面に分布している。原形をとどめた炭化材がみられる。上面から一括遺物
4	6	褐色(7.5YR4/3)	シルト		床面上を薄く覆っている。
5	7	黒褐色(10YR3/2)	シルト		均質。
	8	にぶい黄褐色(10YR4/4)	シルト		人為堆積土？　地山ブロックを霜降り状に混じえる。
	9	褐色(10YR4/4)	シルト		地山ブロックを中量混じえる。ややかたい。
6	10	褐色(10YR4/4)	シルト	R	やわらかく，ボソボソしている。
7	11	赤灰色(2.5YR4/1)	シルト	カマド燃焼室	
	12	灰赤色(2.5YR4/2)	シルト		
	13	褐灰色(5YR4/1)	シルト		ややしまりがある。
	14	赤褐色(10R 4/4)	シルト		焼土層。
	15	暗赤灰色(10R 4/1)	シルト		焼土粒が多量に混じる。
8	16	赤灰色(2.5YR5/1)	シルト	カマド煙出しピット	
	17	にぶい赤褐色(5YR5/3)	シルト		
	18	黒色(5YR2/1)			炭層。
	19	暗赤灰色(7.5R 4/1)	シルト		
	20	赤褐色(10R 4/3)	シルト		
	21	赤褐色(10R 4/4)	シルト		焼土を多量に混じえる。
9	22	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	周溝内	ややかたい。

第13図　ＳＩ123 住居跡

造を支えるための木材とみられるものはまったく検出されなかった。

こういったことから第３層の性格は，凹みとなった廃絶後の住居跡へ遺物を一括投棄し，そこへ火を放った結果生じたものとみなされる。したがって，本住居跡の廃絶の原因は，これまでに検出された火災住居跡（宮城県多賀城跡調査研究所：1978.3，築館町教育委員会:1988.3）とは区別して考えられる。

〔壁〕　遺存状況は良好で，しっかりとしている。直立気味に立ち上がっており，25cm～35cmの壁高がある。

〔床〕　平坦で凹凸が無い。南西部では周辺よりややレベルが下がっている。

〔カマド〕　北壁の中央部に付設されている。遺存状況はきわめて良好で，煙道は天井部が崩落せずに残っていた。燃焼部は白色粘土で構築されており，幅40cm，奥行70cmの規模がある。底面は浅く皿状に凹み，中央には倒立した土師器甕の体部下半が支脚として据えつけられていた。煙道部との境は，住居壁の延長線上に一致する落差約15cmの段で区画されている。

一方，煙道部はこの段から住居外へ66cmのびる煙道とその先端に掘られた径30cmの煙出しのピットからなる。

〔柱穴〕　検出されなかった。

〔周溝〕　カマドとＲを除く各辺の住居壁沿いを巡り，全周する。規模は幅10cm～20cm，深さ５cm～８cmである。堆積土は灰黄褐色のかたいシルトで，竪穴内のものとは区別される。

〔ピット〕　カマドの対称位置となる南壁中央部で，１基検出された（Ｒ）。このピットの南半分は，住居壁を外側へ掘り込んでいる。規模は南北58cm，東西45cmで，平面形は楕円形をなす。堆積土はやわらかく，炭化物をわずかに混じえている。また北半では，このピットの周囲を巡る黄褐色の粘土帯が検出されており，このピットに関連する施設と思われる。

〔出土遺物〕　第３層上面を中心に質量ともにかなり豊富な遺物が出土した。目立ったものとしては，脚部に方形の透しをもつ円面硯，ヘラ切り無調整の須恵器坏・蓋などがある。またＲの堆積土中からも，ほぼ完形品のヘラ切り無調整の坏が１点出土した。

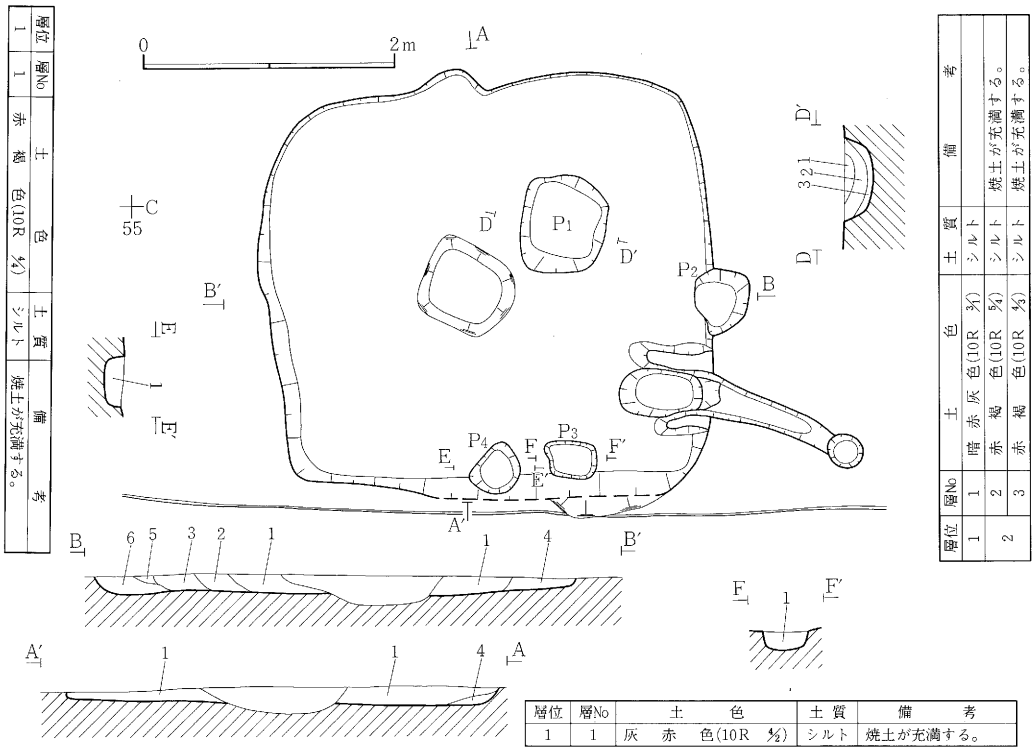
ＳＩ124住居跡

〔重複〕　遺構との重複はないが，このあたり一帯はカクランが著しい。このためプランは地山面をかなり削り込んで確認した。

〔平面形・規模〕　東西3.6m，南北3.2mの東西にやや長い方形をなす。

〔方向〕　発掘基準線に対し，南北方向で西へ3°振れている。

〔堆積土〕　竪穴内の堆積土は３層に大別された。第１層は住居跡中央にレンズ状に堆積しており，やわらかくしまりがない。第２層はカマド周辺に堆積しており，白色粘土のブロックを混じえている。第３層は南壁と西壁ぎわに堆積し，地山ブロックを霜降り状に混じえている。



層位	層No	土色	土質	備考
1	1	赤褐色(10R 4/4)	シルト	焼土が充満する。

層位	層No	土色	土質	備考
1	1	暗赤灰色(10R 3/1)	シルト	
2	2	赤褐色(10R 5/4)	シルト	焼土が充満する。
	3	赤褐色(10R 4/3)	シルト	焼土が充満する。

層位	層No	土色	土質	備考
1	1	灰赤色(10R 5/2)	シルト	焼土が充満する。

層位	層No	土色	土層	分布	備考
1	1	黒褐色(10YR 3/1)	シルト	竪穴内	均質でしまりなし。
2	2	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト		カマド崩落土の白色粘土をブロック状に混じえる。
	3	にぶい黄褐色(10YR 4/3)	シルト		下部にカマド崩落土の白色粘土大粒をブロック状に混じえる。
3	4	灰黄褐色(10YR 4/2)	シルト		南・西壁ぎわに分布する。地山ブロックを霜降り状に混じえる。粘性・しまりがある。
4	5	褐灰色(5YR 5/1)	粘土質シルト	P_2	粘性・しまりがある。
	6	赤橙色(10R 6/8)	シルト		焼土が充満する。

第14図　ＳＩ124 住居跡

〔壁〕　遺存状況はきわめて悪い。立ち上がりはゆるやかで，確認面から４cm～８cmあまりの高さがある。

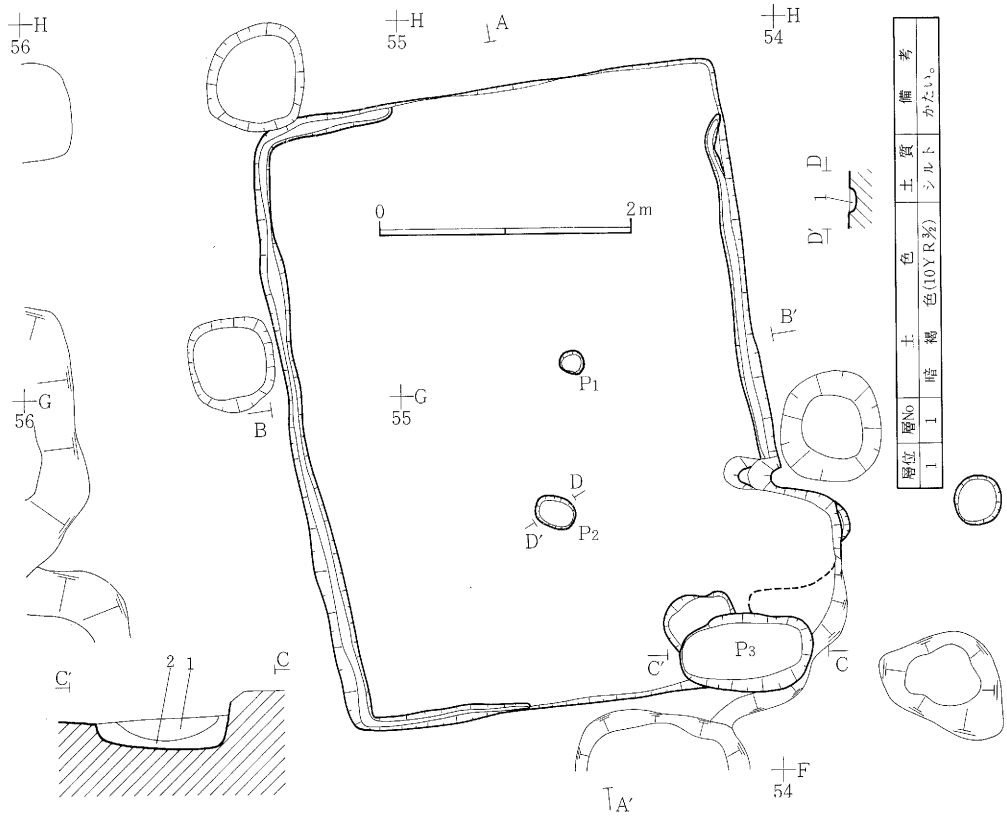
〔床〕　凹凸がある。上面には，カマド付近から中央部にかけて焼土と炭の細粒が分布しており，汚れている。

〔カマド〕　東壁の南隅近くに付設されている。遺存状況は悪い。焼燃部は白色粘土で構築されており，規模は幅40cm，奥行50cmである。煙道部との境界は，住居壁の延長線上に一致する落差およそ７cmの段で区画されている。底面は浅く皿状に凹んでおり，焼土の堆積がみられた。一方，煙道部は住居の東西方向に対し，大きく南に振れている。

〔柱穴〕　検出されなかった。

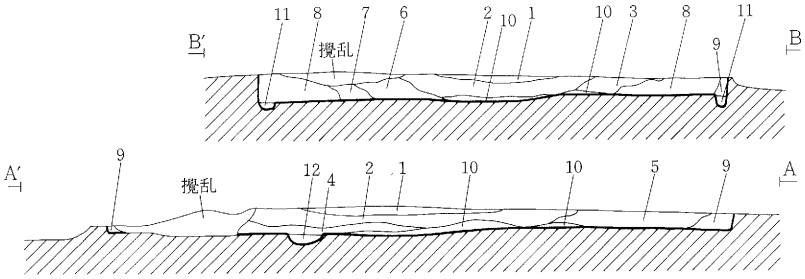
〔周溝〕　検出されなかった。

〔ピット〕　焼土の充満する計４基のピットが検出された（P_1～P_4）。これらは床面上にある大形とP_1と，壁ぎわにある小型のP_2～P_4に区別される。



層位	層No	土色	土質	備考
1	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	かたい。

層位	層No	土色	土質	備考
1	1	灰赤色(2.5YR5/2)	シルト	焼土・白色粘土ブロックが充満する。
	2	赤褐色(10R 4/4)	シルト	焼土が充満する。



層位	層No	土色	土質	分布	備考
1	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	竪穴内	ややしまりがある。均質。
	2	褐灰色(10YR4/1)	シルト		層No.1に較べてやや砂質。
2	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト		地山ブロックをまだらに混じえている。きたない。
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト		均質。南半を中心に堆積している。
	5	オリーブ褐(2.5Y4/3)	シルト		細かな地山粒をまだらに混じえる。きたない。
	6	暗褐色(10YR3/3)	シルト		地山ブロックを均質に混じえている。
	7	暗褐色(10YR3/3)	シルト		地山ブロックを均質に混じえている。
3	8	にぶい黄褐色(7.5YR5/3)	シルト		均質。
	9	にぶい黄褐色(7.5YR5/3)	シルト		均質。層No.8より黒色味が強い。
4	10	黒褐色(10YR2/3)	シルト		粘性がある。床面上を薄く覆っている。
5	11	褐色(10YR4/4)	シルト	周溝内	やや砂質。
6	12	暗褐色(10YR3/2)	シルト	P1	やや粘性・しまりがある。

第15図　S I 125 住居跡

〔出土遺物〕　カマド周辺の床面上から，土師器坏・甕，須恵器坏・高台付坏・蓋・甕が出土した。須恵器坏はいずれもヘラ切り無調整のもので,「上」の墨書のみられるものが１点ある。また，土師器はロクロ使用・不使用のものが混在している。

ＳＩ125住居跡

〔重複〕　遺構との重複は無いが，南東部ではカクランによる破壊が著しい。

〔平面形・規模〕　南北に細長い整った長方形をなす。南北5.0m，南西3.8m を計測する。

〔方向〕　発掘基準線に対し，南北方向で西へ8°振れている。

〔堆積土〕　竪穴内の堆積土は，４層に大別された。第１層と第２層は，住居跡中央にレンズ状に堆積するもので，色調は暗褐色を主体とする。第３層は壁ぎわに堆積しており，にぶい黄褐色を呈している。第４層は粘性のある黒褐色のシルトで，床面上を直接覆っている。

〔壁〕　直立気味に立ち上がっており，10cm～18cmの高さまで残存している。

〔床〕　平担で凹凸がない。

〔カマド〕　東壁の南隅近くに付設されている。カクランのため遺存状況は悪い。煙道部は煙出しのピット以外は残っておらず，また，燃焼部の南側壁も破壊されていた。しかし，南側壁の想定される位置は床面の汚れがなくプライマリーな地山面が露出している（第15図破線)。ここで計測すると燃焼部の規模は，幅80cm，奥行84cmである。

〔柱穴〕　検出されなかった。

〔周溝〕　カマドを除く各辺の壁沿いを巡るが，北辺と南辺の一部では一部絶切れている。規模は幅16cm～20cm，深さ３cm～５cmである。断面形はＵ字形をなす。堆積土はやや砂質の褐色のシルトであり，竪穴内の堆積土とは区別される。

〔ピット〕　計３基検出された（P_1～P_3)。このうちP_3は貯蔵穴と考えられる。

〔出土遺物〕　出土遺物は少量で，カマド周辺の床面上とカマド燃焼部の天井部崩落土上面から土師器甕が出土した。これらは，ロクロ使用・不使用のものが混在している。

ＳＩ129住居跡

〔重複・確認状況〕　この住居跡は，ＳＤ132Ｂ溝にプランが完全に重複しており，しかも同溝とは一連の堆積過程で土砂が自然流入している。このため，地山面での確認作業の段階では，プランを識別することはできなかった。本住居跡のプラン確認は，あたりの精査が進み，この住居跡の上場まで堆積土がとり除かれた段階である。

〔平面形・規模〕　東西3.2m，南北3.0m の方形をなす。

〔方向〕　発掘基準線に対し，南北方向で西へ18°振れている。

〔堆積土〕　第１層は灰黄褐色のシルトで，レンズ状に堆積しており，地山ブロックを多量に混じえている。第２層は壁ぎわに堆積する黒褐色のシルトである。ところで本住居跡は、前

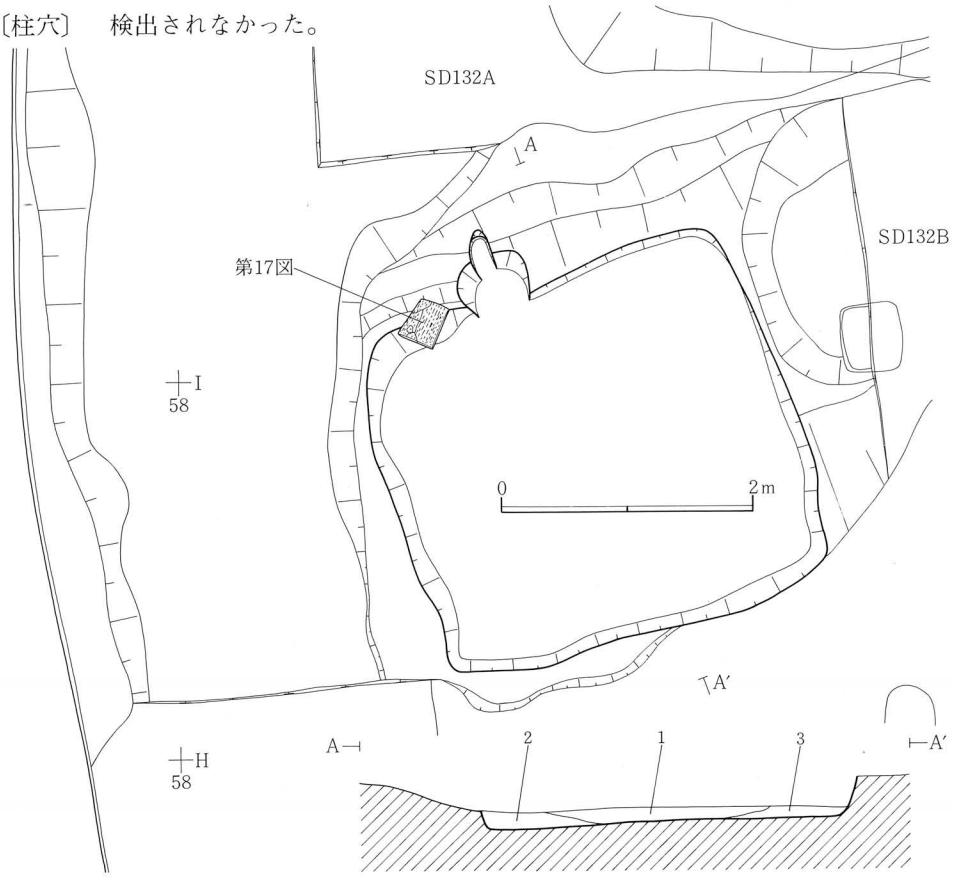
述したようにＳＤ 132 Ｂ溝と一連の堆積過程で埋まっていることから，年代的にはきわめて近い関係にあると思われる。一方，これより古いＳＤ 103 Ａ溝とは壁が接するほど近接していることから，この溝が機能していた段階から営まれていたとは思われない。したがって，この住居跡はＳＤ 103 溝がつくり替えられた時に短期間営まれ，土取りがこの場所に及んだ時点には既に廃棄されていたと推定される。

〔壁〕　立ち上がりは丸味をおびているが，しっかりとしている。壁高は，最も保存の良い南壁で30cm前後ある。

〔床〕　比較的平坦で凹凸がない。全体に北側へむかってゆるやかに傾斜している。

〔カマド〕　北壁中央のいくぶん西寄りの位置で，小型のカマドが検出された。燃焼部は，構築に際し住居壁を外側へ掘り込んでおり，幅56cm，奥行48cmの丸味をおびた方形をなす。壁面は焼けている。一方，煙道部は長さ36cm の短いもので，煙出しのピットをもっていない。

〔柱穴〕　検出されなかった。

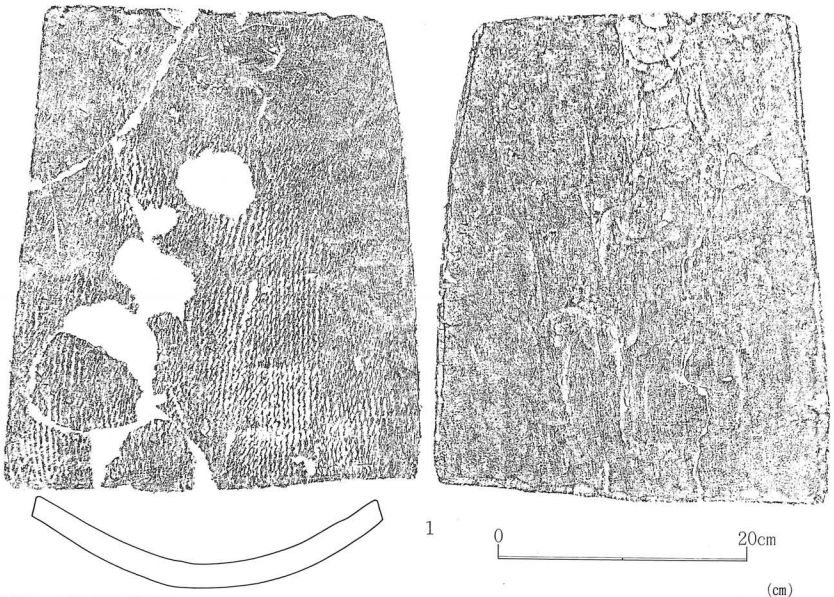


層位	層No	土　　色	土　質	分　布	備　　考
1	1	灰黄褐色(10YR⅘)	シルト	竪穴内	地山ブロックを多量に混じえる。
2	2	黒褐色(10YR⅔)	シルト		均質で混入物を混じえない。
	3	黒褐色(10YR⅔)	シルト		地山ブロックを不規則に混じえる。

第16図　ＳＩ129 住居跡

〔周溝〕　検出されなかった。

〔出土遺物〕　カマド西側の住居壁にたてかけられた状態で完形品の平瓦が１点出土した（第17図）。凸面には縄叩き目が残り，一枚造りとみられる。



(cm)

No	種別	器種	出土遺構	層No	法量			痕跡		登録
					全長	広端	狭端	凹面	凸面	
1	瓦	平瓦	ＳＩ129	床	38.5	29.8	25.0	布目(単一)・凸型台圧痕→ナデ	縄叩キメ(縦位)→原体のつぶれ	Ｇ－５

第17図　ＳＩ129住居跡出土遺物

その他の出土遺物は無い。

ＳＩ130住居跡

〔重複〕　現状ではＳＤ132溝との切り合いはないが，後述するように，本来両遺構は重複していたと思われる。また，ＳＫ140土壙と重複しており，これより古い。

〔平面形・規模〕　南北に細長い長方形をなし，ややゆがみがある。南北3.1m，東西2.3m。

〔方向〕　発掘基準線に対し，南北方向で東へ12°振れている。

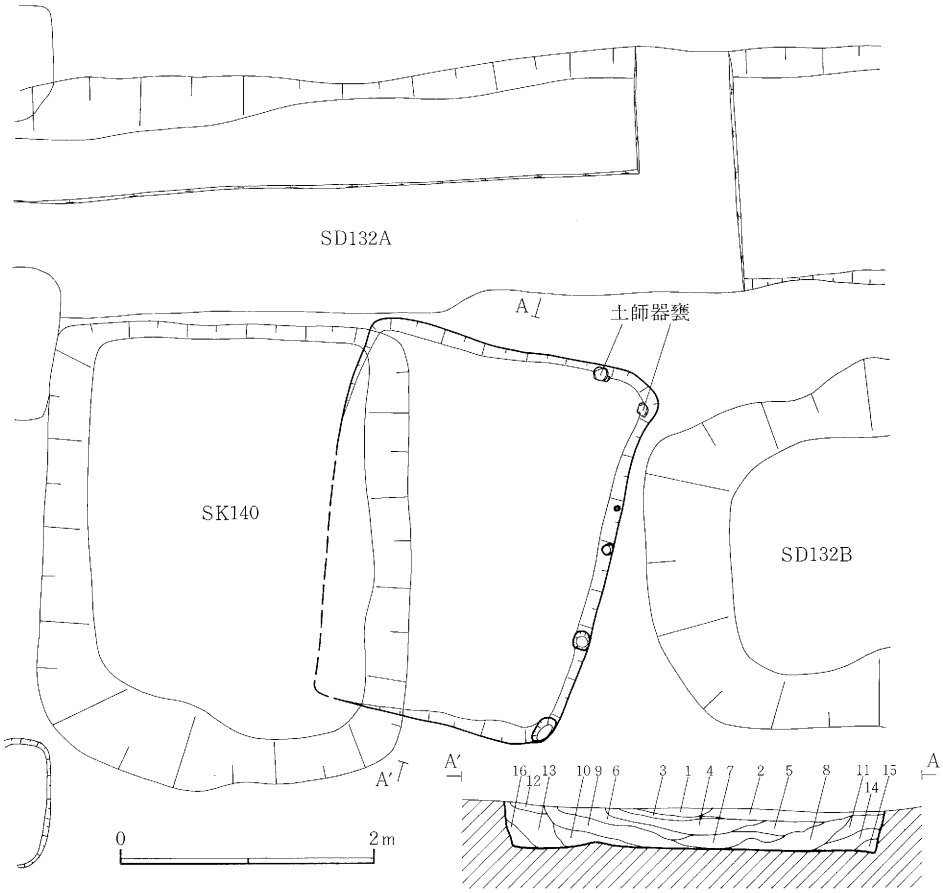
〔堆積土〕　堆積土は４層に大別された。このうち第１～３層は，住居跡中央にレンズ状に堆積するもので，全体に混入物をあまり含まず均質でやわらかい。色調は灰黄褐色ないしにぶい褐色を主体とし，比較的明るい。一方，第４層は壁ぎわに堆積するもので，地山ブロックを主体とする混入物を多量に含んでいる。また色調も，第１～３層に較べて暗いものが多い。

なお本住居跡の堆積土をＳＤ132Ｂ溝の堆積土と比較したところ，両遺構は一連に埋まったものであった。このことから本来，同溝とは上部で重複していた可能性が高いと思われる。したがって，前述したＳＩ129住居跡と同様に，この住居跡は区画溝のつくり替えに伴って営まれたものと推定される。

〔壁〕　直立気味に立ち上がっている。確認面から30cm～40cmの高さまで残っている。

〔床〕　地山面を直接床面とし，貼床は施されていない。

〔カマド〕　住居北東隅でカマドと思われる箇所が検出された。ここはプランがいくぶん外側に突出しており，壁は焼けている。またこの両側には，倒立した土師器甕が１個体づつ据えられており，側壁の芯として用いられたものと考えられる。しかし，住居壁の残りが良好なのに



層位	層No	土色	土質	分布	備考
1	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	竪穴内	細かな地山粒を多量に混じえる。
2	2	褐灰色(7.5YR4/2)	シルト		均質で混入物を含まない。
	3	黒色(10YR1/1)			炭層。
	4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		均質で混入物を含まない。
	5	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		地山ブロックを不規則に混じえる。
3	6	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		地山ブロックを微量に混じえる。
	7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト		全体に均質でやわらかい。
	8	にぶい褐色(10YR5/3)	シルト		地山ブロックをやや多めに混じえる。
	9	にぶい褐色(10YR5/3)	シルト		
	10	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		上部は地山ブロックをやや混じえる。
4	11	褐色(10YR4/4)	シルト		地山ブロックを霜降り状に混じえる。
	12	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		かたい。
	13	暗褐色(10YR3/3)	シルト		地山ブロックを霜降り状に少量混じえる。
	14	黒色(10YR2/1)	シルト		大粒の地山粒をまばらに混じえる。
	15	明黄褐色(10YR7/6)	シルト		地山崩落土。
	16	黒褐色(10YR2/2)	シルト		地山ブロックを霜降り状に混じえる。

壁ぎわに堆積している。

第18図　ＳＩ130 住居跡

もかかわらず，住居外へのびる煙道は検出されなかった。このことから，本遺跡に一般的なカマドとは，基本的に構造の異なるものと推定される。

〔柱穴〕　検出されなかった。

〔壁柱穴〕　東壁で壁柱穴かと思われるピットが４個検出された。しかし，他の壁ではまったく確認されていないことから，やや疑問が残る。

〔周溝〕　検出されなかった。

〔出土遺物〕　カマドの施設として２個体，床面上から１個体の土師器甕が出土した。いずれもロクロ不使用で口縁部下端には段が認められる。

③　溝

調査区内からは，６条の溝が発見された（ＳＤ103・132・134～137）。このうちＳＤ103・ＳＤ132溝は，城柵内を区画する二重の区画施設である。この区画の内側には，前述したように大規模な建物群が計画的に配置されている。一方，ＳＤ134～137溝は，具体的な時期を決定することはできないが，他との重複関係から伊治城跡よりはかなり年代の下る遺構と考えられる。

SD103・SD132溝

この２条の溝は，北西のコーナーが検出され，城柵内を並行して走る区画施設であることが判明した。ともに２時期の変遷があり，両者は一体となって機能していたと思われる。方向は北辺に対し，西辺がかなり内側に振れて掘られている。

ところで，この区画施設には,２条の溝の間に盛土による構造物が存在した可能性がある。しかし，掘込み事業や寄柱などそれを裏付ける痕跡はまったく検出されず，また堆積土の状況も盛土の崩壊を示すような様相はみられなかった。したがって，現状としてはこの区画の構造を「二重の溝で構成されたもの」と理解しておきたい。

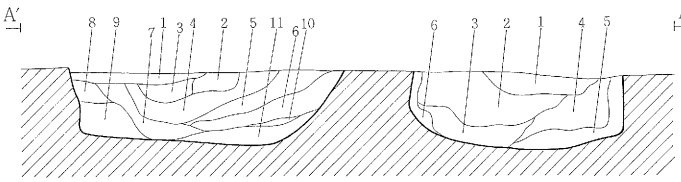
○ＳＤ103 溝

昨年度の第７次調査で北西のコーナーが検出されており，本調査で北辺への延長が41mまで確認された。２時期の変遷があり（ＳＤ103Ａ・Ｂ），新しい段階の溝の堆積土中には灰白色火山灰（山田・庄子：1980.3）が厚く堆積している。また，この溝の古い段階には，北西のコーナーからやや南寄りの位置に，区画外へ延びるＳＤ104溝が接続していたことが判明している（築館町教育委員会：1988.3）。改修は前段階の溝の内側に若干重複して行われている。その結果，断面が皿状をなす溝が，逆台形をなす上幅3.0m～4.0mの溝へ変化している。

出土遺物は大半がＳＤ103Ｂ溝の灰白色火山灰下層から出土した。主体を占めるのはヘラ切り無調整の須恵器坏で，この他，須恵器蓋・甕，土師器甕が出土している。

○ＳＤ132 溝

ＳＤ103溝の内側を並行して走っており，２時期の変遷が認められる（ＳＤ132Ａ・Ｂ）。規模は外側のＳＤ103溝に較べて狭く，上幅は1.7m～2.0mである。また底面も浅い。このためＳＤ132Ｂ溝では，灰白色火山灰は遺構確認段階で部分的に認められる程度であった。改修は前段階の溝の内側で行われており，西辺が若干重複して，北辺がわずかに隙間をおいて実施されている。この結果，底面が平坦で壁の直立して立ち上がる整った溝が，凹凸が激しく土壙の連続した状況を呈する溝へ変化している。



出土遺物は大半がＳＤ132Ｂ溝から出土した。うちわけは土師器坏・甕，須恵器坏・蓋

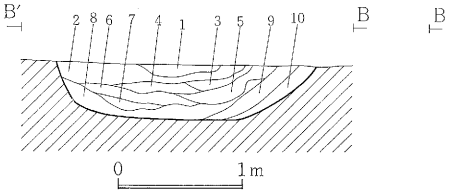
0　2m

層位	層No	土色	土質	遺構	備考
1	1	黒褐色(5YR3/1)	シルト	ＳＤ132Ｂ	やわらかく，しまりがない。
	2	黒褐色(5YR3/1)	シルト		ややかたい。
	3	黒褐色(10YR3/1)	シルト		やわらかく，しまりがない。焼土・炭をわずかに混じえる。
	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト		やわらかく，しまりがない。焼土・炭をわずかに混じえる。
	5	黒色(10YR2/1)	シルト		やわらかく，しまりがない。
2	6	暗褐色(10YR3/3)	シルト		細かな砂粒を斑点状に混じえる。
	7	黒褐色(10YR3/1)	シルト		下部に大粒の地山ブロックを若干混じえる。
3	8	黒色(10YR1.5/1)	シルト		やわらかく，しまりがない。
	9	黒色(10YR1.5/1)	シルト		やわらかく，しまりがない。層No.8と基本的には同一層とみられる。
	10	黒色(10YR1.5/1)	シルト		
4	11	にぶい黄橙色(10YR7/4)	シルト		壁の崩落土とみられる。地山。

層位	層No	土色	土質	遺構	備考
1	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	ＳＤ132Ａ	細かな地山粒を霜降り状に混じえる。
2	2	黒色(10YR1.5/1)	シルト		やわらかく，しまりがない。
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト		やわらかく，しまりがない。
3	4	黒色(10YR1.5/1)	シルト		砂礫粒を若干混じえる。
4	5	黒色(10YR1.5/1)	シルト		層No.4より黒色味が強い。
	6	黒褐色(2.5Y 3/2)	シルト		層No.5に対応し，壁・底面を覆う。

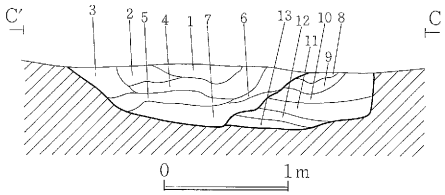
第19図　ＳＤ132（Ａ・Ｂ）溝

・高台付坏・甕，平瓦・丸瓦である。



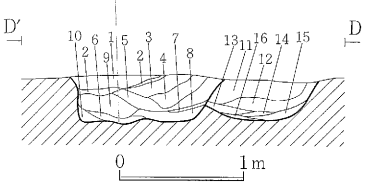
層位	層No	土色	土質	備考
1	1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山ブロック・黒色土を多量に混じえる。かたい。
	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	混入物がなく，やわらかい。しまりなし。
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックをわずかに混じえる。
2	4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	均質でしまりなし。
	5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やや汚れている。
3	6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
4	7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	8	黒色(10YR2/1)	シルト	均質でしまりなし。
5	9	オリーブ褐(2.5Y 4/3)	シルト	細かな地山ブロックを多量に混じえる。
	10	オリーブ褐(2.5Y 4/4)	シルト	細かな地山ブロックを多量に混じえる。

第20図　ＳＤ132Ｂ溝



層位	層No	土色	土質	遺構	備考
1	1	褐灰色(10YR4/1)	シルト	SD132B	砂礫粒を混じえる。
	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		均質。砂礫粒に混じえる。
	3	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		
	4	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		黒色土ブロックがまだらに混入する。
	5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		地山ブロックを霜降り状に混じえる。
	6	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト		細かな地山ブロックを霜降り状に混じえる。
	7	暗褐色(10YR3/3)	シルト		細かな地山ブロックを霜降り状に混じえる。
2	8	褐灰色(10YR4/1)	シルト	SD132A	地山ブロックを多量に混じえる。しまりがある。
	9	オリーブ褐色(10YR4/4)	シルト		均質でしまりがない。
	10	暗灰黄色(2.5Y 4/3)	シルト		細かな地山ブロックを霜降り状に混じえる。
	11	暗灰黄色(2.5Y 4/2)	シルト		細かな地山ブロックを多量に混じえる。
	12	黒褐色(10YR3/1)	シルト		地山ブロックを縞状に混じえる。
3	13	にぶい黄褐色(10YR7/4)	シルト		壁の崩落土。地山。

第21図　ＳＤ132溝



層位	層No	土色	土質	遺構	備考
1	1	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	SD132B	
	2	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト		地山ブロックを多量に混じえる。
2	3	にぶい黄褐色(10YR4/4)	シルト		地山ブロックをわずかに混じえる。
	4	にぶい黄褐色(10YR4/4)	シルト		層No.3よりさらに少なく地山ブロックを混じえる。
	5	にぶい黄褐色(10YR4/4)	シルト		地山粒をわずかに混じえる。
	6	褐灰色(10YR5/1)	シルト		均質。
3	7	黒色(10YR2/2)	シルト		黒色土の薄い層。
4	8	暗灰黄色(2.5Y 4/4)	シルト		細かな地山ブロックを混じえる。
	9	にぶい黄褐色(10YR4/4)	シルト		地山粒をまだらに混じえる。
5	10	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト		壁の崩落土。地山。
6	11	黒色(10YR2/1)	シルト	SD132A	均質でしまりがなく，やわらかい。
	12	黒褐色(10YR3/4)	シルト		細かな地山ブロックを霜降り状に混じえる。
7	13	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト		壁の崩落土？　地山。
8	14	黒褐色(10YR3/4)	シルト		
	15	黒褐色(10YR3/1)	シルト		
9	16	にぶい黄橙色(10YR7/4)	シルト		壁の崩落土。地山。

第22図　ＳＤ132溝

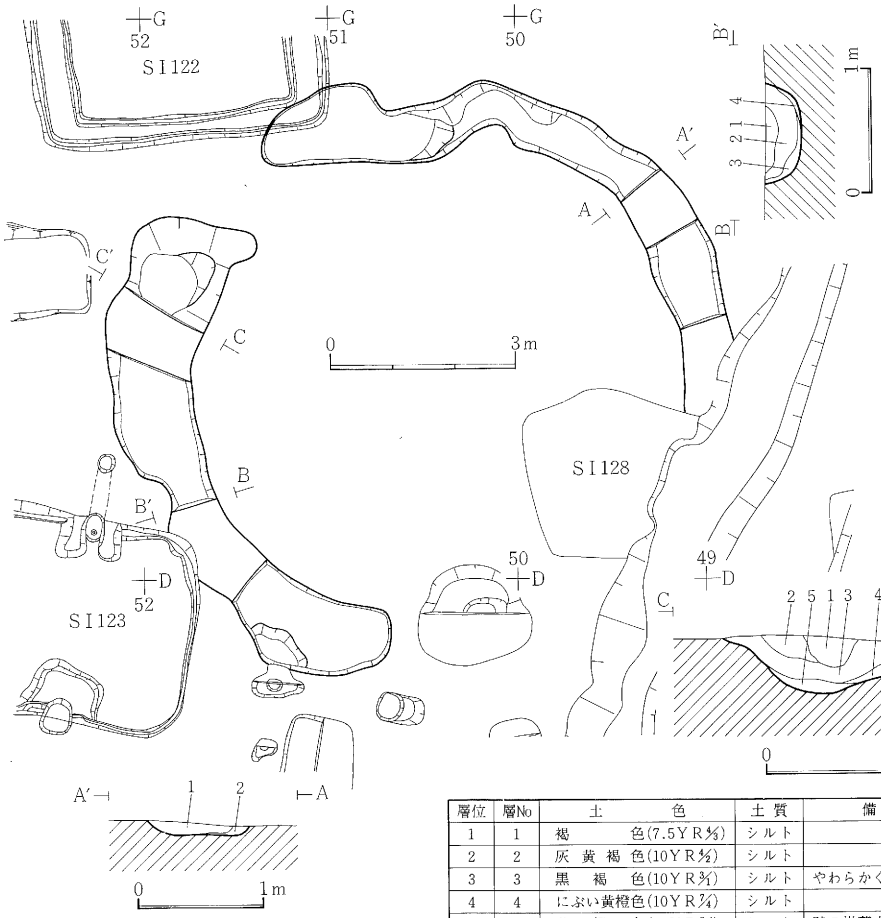
④ 円形周溝

円形周溝は1基発見された（ＳＤ138円形周溝）。

SD138円形周溝

この遺構は，ＳＩ122Ａ・123・128住居跡，ＳＢ142建物跡，ＳＤ133溝と重複しており，このなかで最も古い。径は溝の外側で計測すると9.6ｍである。周溝は北西と南東の一部で絶切れている。内部からは主体部とみられる施設は検出されなかった。底面は凹凸が激しく，堆積土は自然堆積とみられる。

遺物は出土していない。



層位	層No	土色	土質	備考
1	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やわらかく，しまりがない。
2	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
3	3	黄褐色(10YR5/6)	シルト	地山粒を少量混じえる。
4	4	黄橙色(10YR8/6)	シルト	壁の崩落土。

層位	層No	土色	土質	備考
1	1	褐色(7.5YR4/3)	シルト	
2	2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	
3	3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やわらかく，しまりがない。
4	4	にぶい黄橙色(10YR7/4)	シルト	
5	5	黄橙色(10YR8/6)	シルト	壁の崩落土。

層位	層No	土色	土質	備考
1	1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	やわらかく，しまりがない。
2	2	黄橙色(10YR8/6)	シルト	壁の崩落土。

第23図　SD138円形周溝

第 12 次 調 査

調査地　城生町大堀

面　積　1,700m²

期　間　平成元年９月５日～９月16日

第24図　第12次調査区位置図

伊治城跡内にある富野小学校は老朽化が進み，校舎の新築がかねてから要望されてきた。このため，現在の小学校を遺跡外の水田へ移転することが決定したが，今回これにともなって，城生野根岸線が通学路として拡幅・舗装されることになった。

ところで，富野小学校の東側では伊治城の北辺外郭線を構成する土塁と大溝が，現在でも地表面から観察される。このため富野小学校をはさんでその西側にあたるこの路線敷には，外郭線の延長が埋もれていることが十分予想された。そこでこのことを念頭において，９月８日から遺構確認作業を開始した。

その結果，地形の状況から外郭線の位置が想定されていた調査区のなかほどで，予想どおりそれとみられる幅10m 以上の大溝が検出された。ところが，このあたり一帯は地形的に周囲より低いことから湧水が激しく，人力による精査には危険が伴った。そこで精査にはバックホーを用いて 2.5 m ほどまで掘り下げ，10世紀前半に降下した灰白色火山灰（庄子・山田：1980.3）の堆積を確認したが，壁の崩落が激しく，この段階で作業は中止した。

一方，土塁は後世の削平のため，まったく残存していなかった。しかし，この大溝の北辺か

ら12mほど外側へ離れた地点で，これに並行して走る幅2.0m，深さ1.3mの溝が検出された。この溝は堆積土中に灰白色火山灰（庄子・山田：1980.3）が厚くみられ，また須恵器片が少量出土したことから，区画施設の一部をなすものと考えられる。したがって，この付近では土塁とこれに並行して走る二重の溝で，外郭線が構成されていたと推定される。

なお，これとは別に調査区の北半では，古墳時代前期の溝が発見された。この溝は南西－東西方向に走っており，断面はＶ字形をなしている。規模は上幅１.０ｍ～１.２ｍ，深さ０.８ｍ～１.１ｍ程度であるが，後世の削平を受けていることを考えると，当時はきわめて大規模なものであったと推定される。

出土した遺物は，すべて塩釜式の土師器である。これらは底面で潰れた状態で出土したものが大半で，ほぼ同一時期の所産とみなされる。器種には，坏・高坏・器台・甕・壺等があり，すべて日常雑器で構成される。遺存状況は良好で，当該期の好資料になると思われる。

なお，この溝の性格は，集落もしくは豪族層の居宅を巡る環濠の可能性が考えられる。

田端前線発掘調査

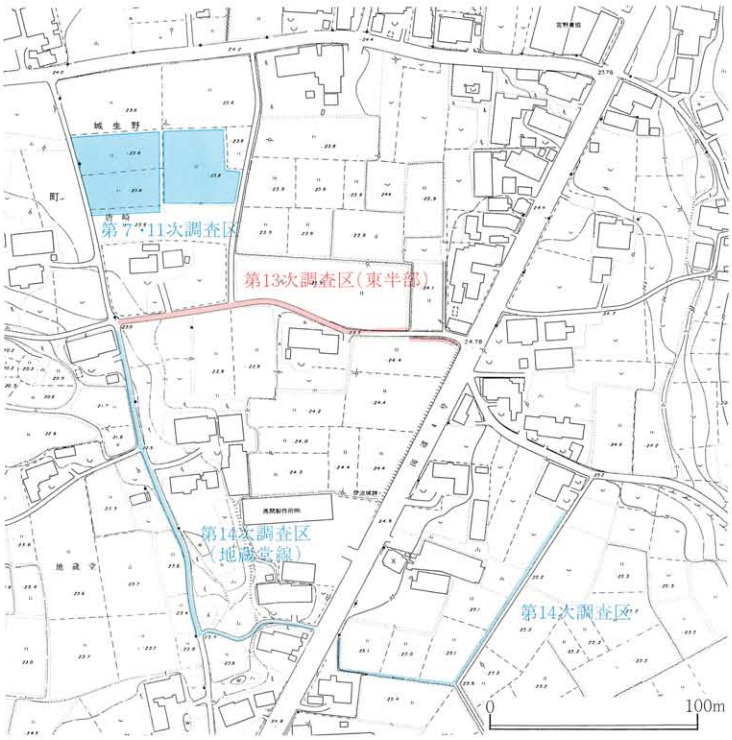
第 13 次 調 査

調査地　城生野唐崎

面　積　1,960㎡

期　間　平成元年10月16日～11月10日

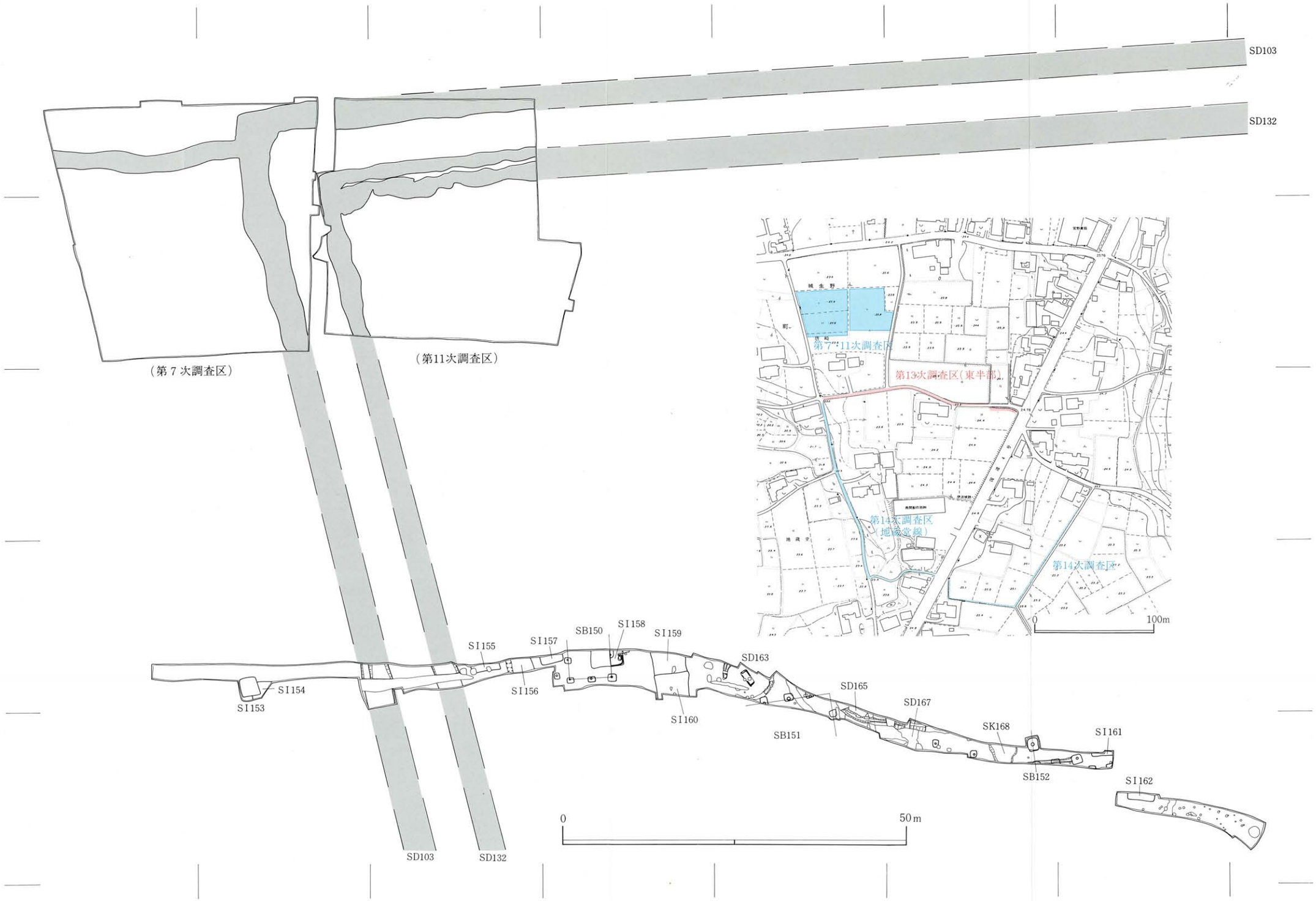
伊治城跡の所在する城生野地区では，昭和62年度に実施された儀平線以来，農道整備事業が継続されている。本年度は，照明寺から国道４号線にむかって東西に走る総延長392ｍの田端前線が対象となった。このため当教育委員会では，年度当初より事業担当者である町農地整備課との協議を再三行い，調査の方法や実施期間あるいは予算の問題などについて，調整を図ってきた。その結果，費用は農地整備課の負担とし，路線敷全面を対象に10月中旬から調査を実施することで合意した。そこで国庫補助事業にもとづいて実施していた第11次調査区を一時中断し，10月16日より作業を開始した。



第25図　第13次調査区位置図

調査は路線敷の西半部から開始したが，この一帯は西側から入り込む沢状の地形を横断している。このため表土下には，グライ化した緑灰色の砂層が厚く堆積しており，時期不明の井戸以外には遺構はまったく検出されなかった。ただし，遺構外からの遺物の量は割合に多く，須恵器坏を主体として200点に近い土器が出土した。これらのなかには墨書のあるものもあり判読が可能なものには,「栗□」・「厨」・「于」・「上」・「㊤」がある。

一方，調査区東半部は台地平坦面に位置することから，古代の遺構の存在が当初から予想されたが，まず第７・11次調査の南側でＳＤ103・132区画溝の西辺の延長が検出された。この地



第26図　第13次調査東区遺構配置図

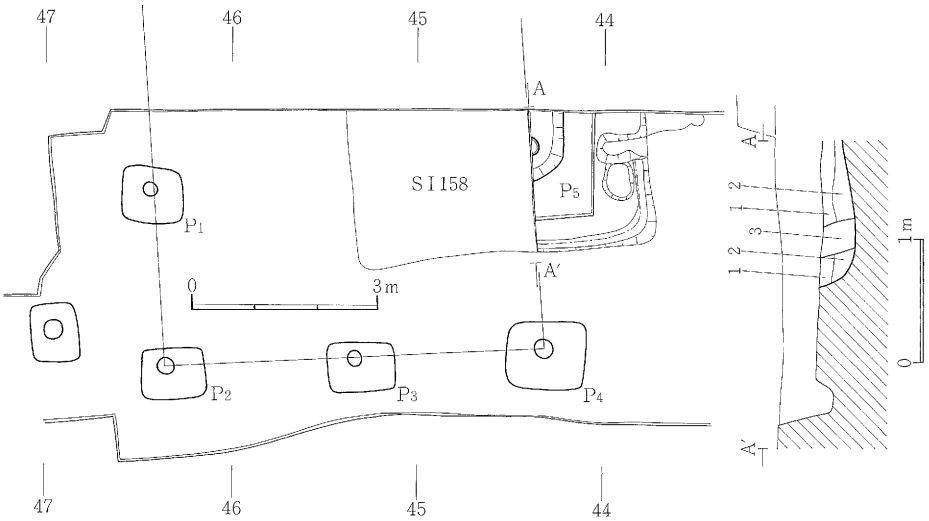
点は北西のコーナーから計測すると，外側のＳＤ103溝で82ｍ，内側のＳＤ132溝で71ｍの位置にあたる。そしてさらに路線敷の東側へ調査を続けたところ，相次いで３棟の建物跡（SB150～152）が発見された。このうちＳＢ150建物跡は，第11次調査区で検出されていた２棟の建物跡（ＳＢ140・141）と柱筋がほぼそろっており，またその他の建物跡も，ほぼ同一の建物方向をとっていることが確認された。こういった状況から，大規模な建物群が計画的に配置された一画は，この農道の東半部にまでその範囲が及んでいることが明らかとなった。

このため調査記録の方法は，急遽これまでの 1/100 の平板測量から，1/20の簡易遣り方測量に変更し，第11次調査と同じ精度に切り換えた。そして，第11次調査の成果とあわせて11月４日には現地説明会を開催し，その成果を一般に公表した。

その後は実測・補足調査を行い，11月10日に一切の作業を終了した。

なお埋め戻し作業にあたっては山砂を入れ，遺構の保存を図っている。

以下では遺構を中心に記述して行く。



層位	層No	土色	土質	分布	備考
1	1	明黄褐色(10YR7/6)	シルト	掘り方	地山を主体とし，黒色土が縞状になる。
	2	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト		層No.1に較べて黒色土の入る割合が高い。
2	3	黒色(10YR2/1)	シルト	柱痕跡	やわらかく，しまりがない。北側へむかって斜め方向に入っている。

第27図　ＳＢ150 建物跡

①　建物跡

建物跡は３棟発見された（ＳＢ150～152）。第７次調査区での成果から，いずれもＳＤ103・132 溝の内部に計画的に配置された一連の建物跡と考えられる。

SB150建物跡

桁行２間以上，梁行２間の南北棟で，ＳＩ158住居跡と重複しており，東桁行のP₂はこの住居跡の床面下で検出された。

この建物跡は，ＳＢ140建物跡と桁行の柱筋をそろえ，さらにＳＢ141建物跡とも西梁行の

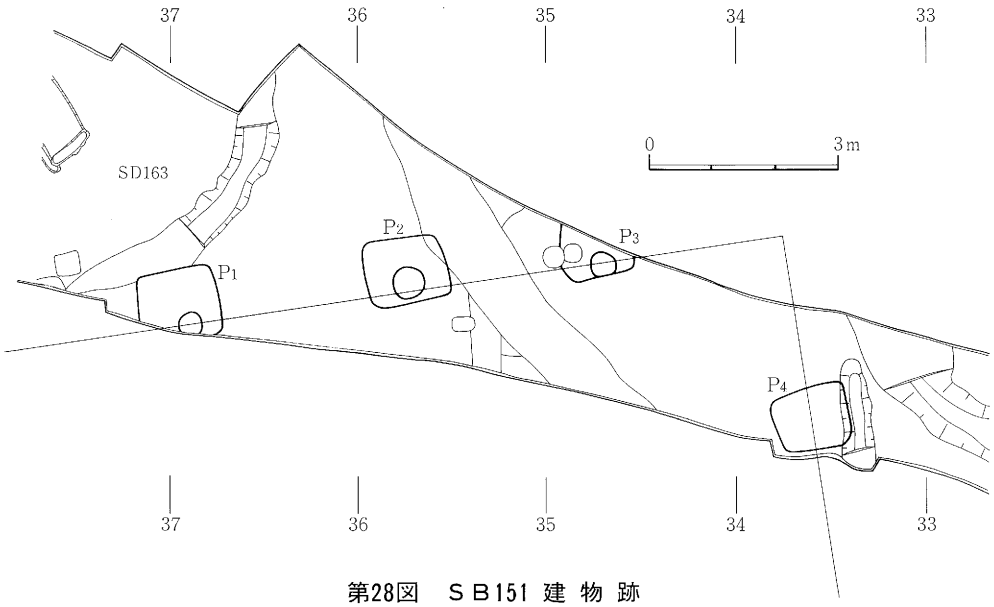
柱筋をそろえている。

柱穴は0.8m～1.3mの方形をなし，径25cm～32cmの柱痕跡が観察される。建て替えの痕跡は認められない。柱間寸法は，桁行が東側柱列で3.01m，南側柱列で2.84m，南梁行が3.05m＋3.05m（総長6.10m）を計測する。

P_3で実施した断割り調査によると，遺存状況は確認面から65cmの深さまで残っている。掘り方埋土は地山ブロックを主体とする互層である。出土遺物は無い。

なお，建物跡南東隅付近で柱穴が1個検出されているが，これとの関係は不明である。

SB151建物跡



第28図　ＳＢ151 建 物 跡

東西4間以上，南北2間以上の建物跡で，調査区の南側と西側へのびている。ＳＸ163円形周溝墓と重複しており，これより新しい。

柱穴は1.1m～1.3mの方形をなし，柱痕跡は径38cm～45cmを計測する。建て替えの痕跡は認められなかった。柱間寸法は，北側柱列のR－P_3間で3.63m＋3.13mを計測する。

遺物は出土していない。

SB152建物跡

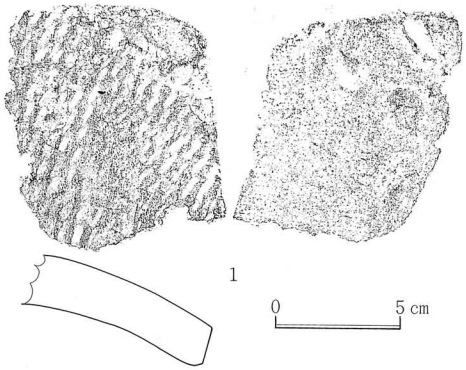
調査区の東端近くで，南北に並ぶ2個の柱穴を確認した（R・P_2）。

Rの東側には，これ以外にほぼ等間隔に並ぶ2個の柱穴が確認されているが，埋土の特徴がR・P_2とは異なることから，同一建物跡の柱穴と断定することはできなかった。

P_2で実施した断割り調査によると，この建物跡には2時期の変遷が認められる（ＳＢ152Ａ・152Ｂ）。このうち新しい段階の柱穴は，1.8m×1.6mの方形をなし，柱痕跡は径48cmを計測す

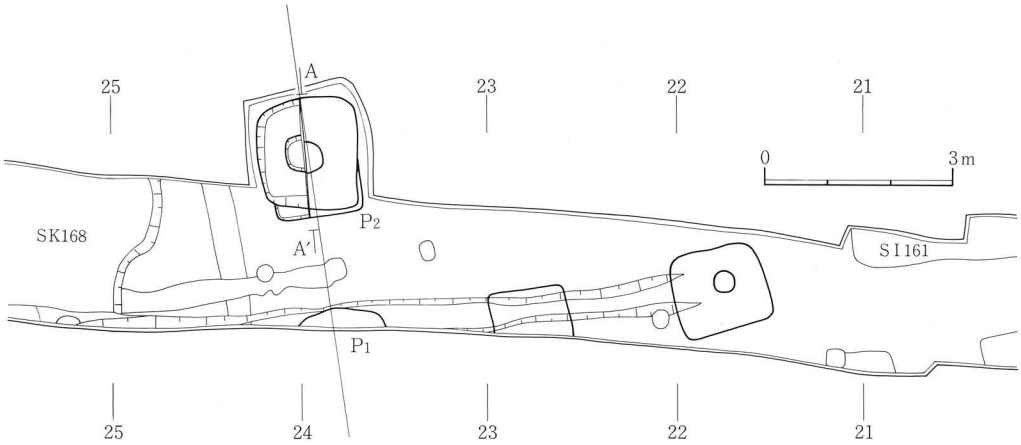
る。掘り方埋土は地山ブロックを主体とする互層である。このなかには焼土と炭が充満しており，また焼壁の細片も認められた。したがって火災後の修復である可能性もある。

出土遺物は，ＳＢ152Ｂ建物跡の掘り方埋土から，凸面に縄叩き目の残る平瓦片が１点出土した（第29図）。

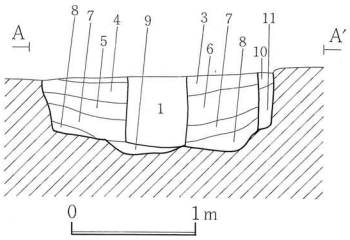


No	種別	器種	出土遺構	層No	痕跡		登録No
					凹面	凸面	
1	瓦	平瓦	ＳＢ152Ｂ	3	布目（単一）→ナデ。	縄叩キメ(斜位)→凹型台使用に伴う原体のつぶれ	Ｇ－６

第29図　SB152B建物跡出土遺物



第30図　ＳＢ152 建 物 跡



層位	層No	土色	土質	遺構	分布	備考
1	1	灰黄褐色(10YR⅔)	シルト	ＳＢ152Ｂ	柱痕跡	やわらかく，しまりなし。砂礫粒を若干含む。
2	2	黒褐色(10YR⅔)	シルト		掘り方	しまりがある。
	3	灰黄褐色(10YR⅔)	シルト			地山ブロック・黒色土ブロック・炭化物・焼土・焼壁を多量に混じえる。
	4	暗灰黄色(2.5Y ⅔)	シルト			層No. 3とほぼ同じ土性であるが，やや色調が暗い。
	5	暗灰黄色(2.5Y ⅔)	シルト			層No. 4より黒色土の混じる割合が高い。しまりあり。
	6	暗灰黄色(2.5Y ⅔)	シルト			層No. 5より焼土・炭化物の混じる割合が少ない。しまりあり。
	7	にぶい黄褐色(10YR⅝)	シルト			大粒の地山ブロックを多量に混じえる。焼土・炭化物を若干含む。
	8	黄褐色(2.5Y ⅝)	砂			砂礫によって構成されており，固くしまっている。
	9	黄褐色(2.5Y ⅝)	砂			層No. 8と層相はほぼ同じ。柱掘り方埋土。
3	10	灰黄褐色(10YR⅝)	シルト	ＳＢ152Ａ	掘り方	細かな地山ブロックを多量に混じえる。しまりあり。
	11	灰黄褐色(10YR⅝)	シルト			細かな地山ブロック・黒色土ブロックを多量に，焼土を若干混じえる

第31図　SB152建物跡柱穴断面図

② 住　居　跡

住居跡９棟発見された（ＳＩ153～162)。

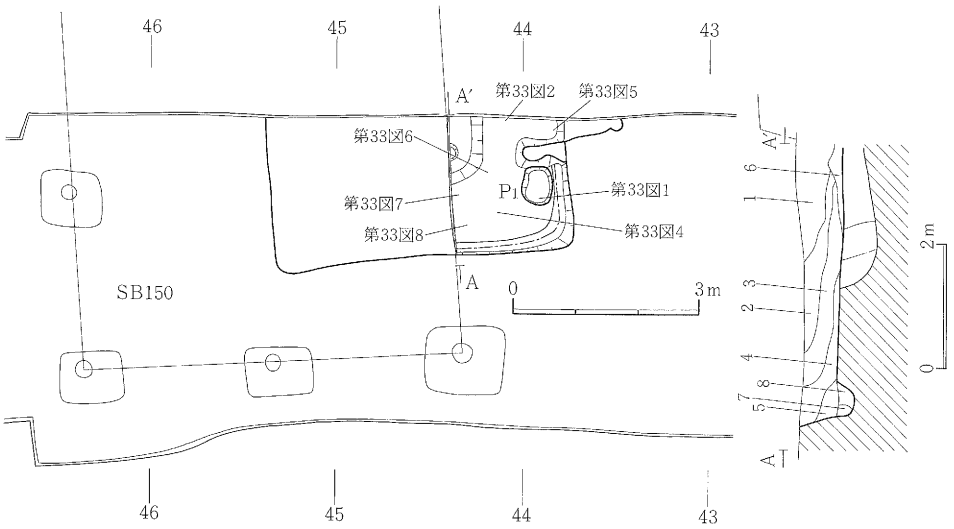
これらは検出状況から，ＳＤ103・132溝の内側で発見された７棟（ＳＩ155～162）と，外側で発見された３棟（ＳＩ152～154）に大別される。このうちＳＩ158住居跡は，前述したＳＢ150建物跡を切って構築されている。方向は，大半が発掘基準線に対し南北方向でやや西に振れるもので，第７次調査区と同様の傾向を示している。

以下では，精査を実施したＳＩ158住居跡について説明する。

ＳＩ158住居跡

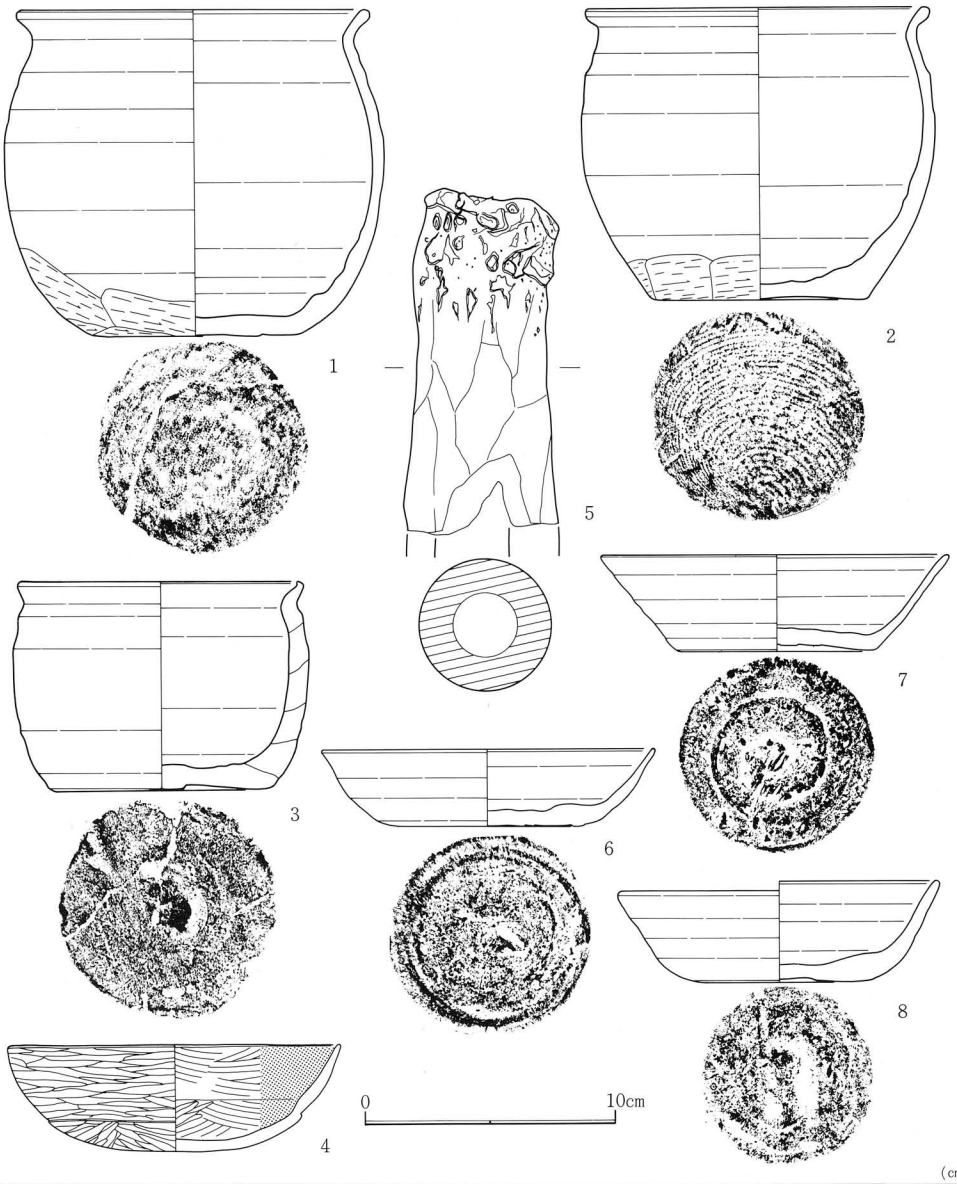
この住居跡はＳＢ150建物跡を切って構築されている。平面形は方形をなし，北半分は調査区外へひろがっている。精査は推定される床面積の¼で実施した。

規模は東西が4.8m で，南北は2.3m 以上ある。カマドは東壁中央に付設されている。燃焼部は白色粘土で構築されており，底面中央には支脚が据えられている（第33図)。煙道は92cmの長さがあり，先端には煙出しのピットが掘られている。柱穴は，精査を実施した範囲内では検出されていない。周溝は住居壁沿いを巡っており，プランの内側には壁に密着した状態で黒色土



層位	層No	土　色	土　質	分　布	備　考
1	1	黒　褐　色(10YR2/2)	シルト	竪穴内	細かな地山粒を霜降り状に混じえる。
	2	暗　褐　色(10YR3/3)	シルト		大粒の地山粒を霜降り状に混じえる。
	3	黒　褐　色(10YR3/2)	シルト		細かな地山粒を霜降り状に混じえる。
2	4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		均質。混入物がなく，しまりがない。
3	5	黒　褐　色(10YR3/2)	シルト		壁ぎわに堆積している。しまりがある。
4	6	黒　褐　色(10YR3/1)	シルト		床面上を覆っている。細かな地山粒をわずかに混じえる。
5	7	黒　褐　色(2.5Y 3/1)	シルト	周溝内	壁板の痕跡。
	8	暗 灰 黄 色(2.5Y 4/2)	シルト		

第32図　ＳＩ158 住 居 跡



(cm)

No	種別	器種	出土遺構	層No	法量 器高	法量 口径	法量 底径	外面 口縁部	外面 体部	外面 底部	内面 口縁部	内面 体部	内面 底部	登録No
1	土師器	甕	S I 158	床	13.0	13.9	8.4	ロクロナデ	ロクロナデ 手持ちケズリ	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	D－21
2	土師器	甕	S I 158	床	11.7	13.7	8.6	ロクロナデ	ロクロナデ 手持ちケズリ	回転糸切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	D－22
3	土師器	甕	S I 158	床	8.4	11.3	8.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	D－23
4	土師器	坏	S I 158	床	4.3	13.2		ミガキ	ミガキ	ケズリ ミガキ	ミガキ 黒色	ミガキ 黒色	ミガキ 黒色	C－56
5	フイゴ羽口		S I 158	床	長さ13.5以上。幅5.5。			カマドの支脚として転用されている。外面はナデ調整。溶解した鉄が付着。						P－1
6	須恵器	坏	S I 158	床	3.1	13.3	7.6	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－128
7	須恵器	坏	S I 158	床	3.9	13.8	7.7	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－129
8	須恵器	坏	S I 158	床	3.9	12.8	6.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	E－130

第33図　SI158住居跡出土遺物

が帯状に認められた（第32図一点鎖線）。これは青森県青森市近野遺跡（青森県教育委員会：1975.3)での確認例から，壁板の痕跡と考えられる。またカマドの南脇には貯蔵穴が掘られている。

出土遺物は床面ならびに貯蔵穴から土師器坏１点・甕３点，須恵器坏３点が出土した（第33図)。いずれも完形品である。

③　溝

溝は９条検出された（ＳＤ103・132，167～171)。このうちＳＤ103・132溝は，第７・11次調査区で検出されていた北西コーナーからの西辺の延長で，計画的に配置された建物群を区画するものである。またＳＤ165・167溝は，精査を実施していないため具体的な時期や性格を決定することはできないが，他との重複関係や堆積土の状況から，古代の遺構である可能性をもっている。以下ではこの４条について記述する。

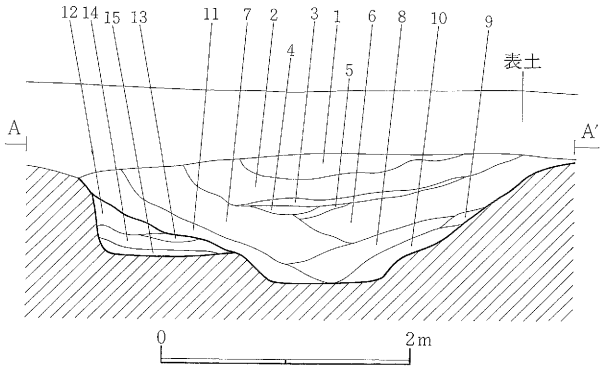
SD103・SD132溝

第７・11次調査区の南側にあたる場所で検出され，北半で精査を実施した。この２条の溝は城柵内を区画するためのもので，ともに２時期の変遷がある。

これによって西辺は，外側のＳＤ103溝で82m，内側のＳＤ132溝で71ｍまで確認された。

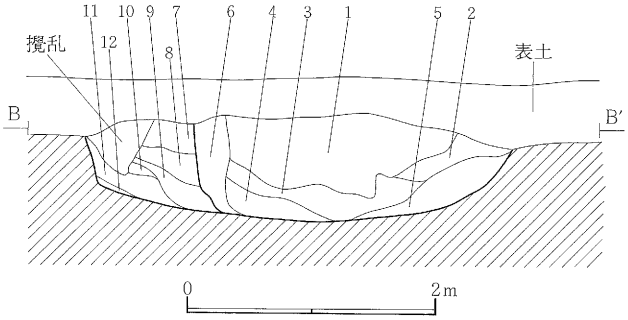
それぞれの特徴については，第11次調査の報告（本書）で既に記しているので，ここでは割愛する。

出土遺物は，大半がそれぞれの溝の新しい段階から出土した。うちわけは，土師器甕，須恵器坏・高台付坏・蓋・甕，平瓦である。



層位	層No	土　色	土　色	遺　構	備　考
1	1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	SD103B	やわらかく，しまりがない。
2	2	黒　色(7.5YR2/1)	シルト		黒ボク土。
3	3	灰白色(2.5Y 8/1)			灰白色火山灰層。
4	4	黒褐色(10YR3/1)	シルト		
	5	褐灰色(10YR4/1)	シルト		
	6	褐　色(7.5YR4/3)	シルト		
5	7	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		下部には砂礫が混じる。
	8	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		層No.7よりやや色調が明るい。砂礫が混じる。
	9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト		
	10	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		下部に砂粒が混じる。
6	11	黒褐色(10YR3/3)	シルト		
7	12	黒褐色(10YR3/2)	シルト	SD103A	細かな地山粒を霜降り状に混じえる。
	13	黒褐色(10YR3/1)	シルト		均質で混入物を含まない。
	14	黒褐色(10YR3/1)	シルト		均質で混入物を含まない。
	15	黒褐色(10YR3/1)	シルト		細かな地山粒をまだらに混じえる。

第34図　ＳＤ103 溝



層位	層No	土色	土質	遺構	備考
1	1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	SD132B	やわらかく，しまりがない。地山粒・炭化物が混じる。
	2	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト		
	3	黒褐色(10YR2/2)	シルト		地山粒をまだらに混じえる。
	4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト		地山ブロックと黒色土の薄い層が縞状に重なる。
	5	黒色(10YR2/1)	シルト		均質。地山細粒をわずかに混じえる。
	6	黒褐色(10YR3/2)	シルト		やわらかく，しまりがない。
2	7	暗褐色(10YR3/3)	シルト	SD132A	均質で混入物が少ない。
	8	黒褐色(10YR2/1)	シルト		地山ブロックをびっしりと混じえている。
	9	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト		細かな地山ブロックが縞状に入る。
	10	黒褐色(10YR2/1)	シルト		地山ブロックを微量混じえる。
	11	黒褐色(10YR2/1)	シルト		地山ブロックを微量混じえる。
	12	黒色(10YR2/1)	シルト		大粒の地山ブロックを少量混じえる。

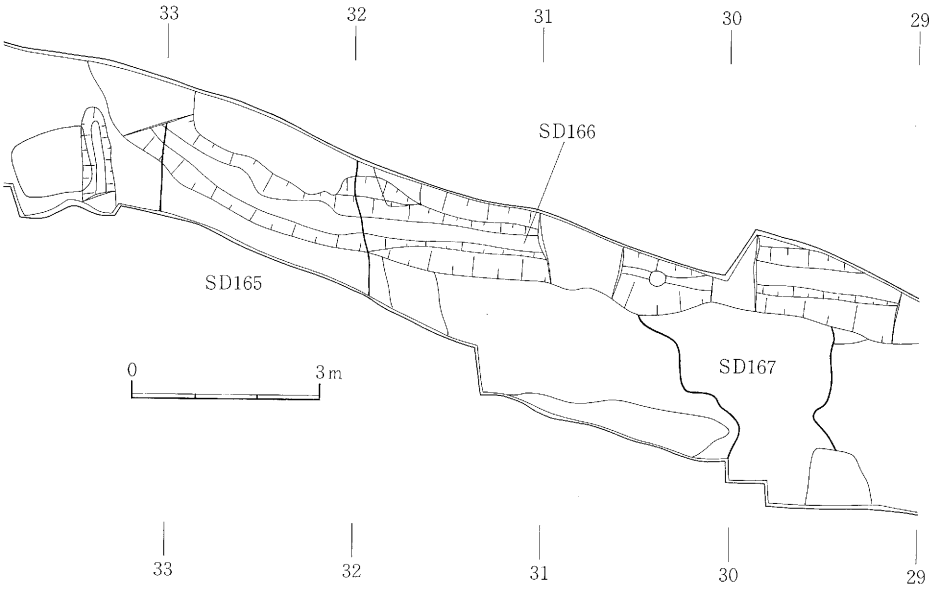
第35図　ＳＤ132 溝

SD165・167溝

この２条の溝は，５ｍ～６ｍの間隔をおいて南北に並行して走っている。ともに周辺の重複する遺構のなかでは，最も古い。

西側のＳＤ165溝は，上幅3.0m～3.1mである。堆積土は重複する溝から観察すると，黒色土と地山ブロックを多量に混じえる暗褐色土が交互に堆積している。

一方，東側のＳＤ167溝は，上幅1.7m～3.0mを計測する。堆積土中には焼土と炭が充満しており，このなかには土師器，須恵器，瓦など古代の遺物が多量に混じっている。



第36図　SD165・167溝

④ 円形周溝墓

円形周溝墓は1基発見された（ＳＸ163円形周溝墓)。

ＳＸ165円形周溝墓

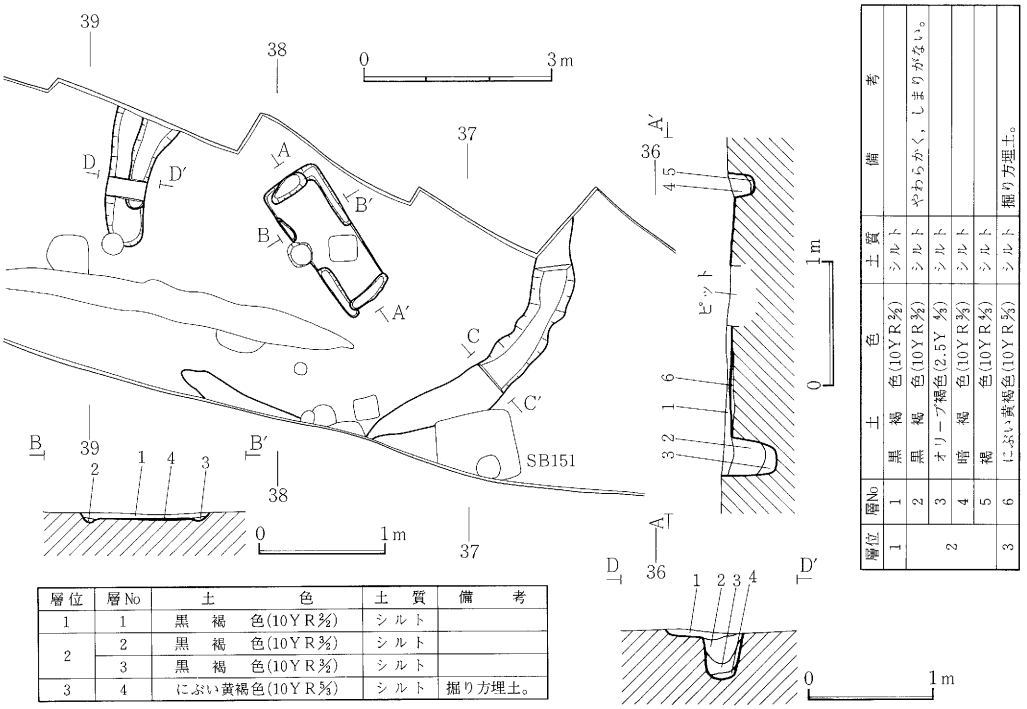
この周溝墓はＳＢ151建物跡と重複しており，これより古い。北西部の一部は調査区外へひろがっている。

周溝は，径が溝の外側で計測すると7.6ｍあり，南西部は一部絶切れている。底面の状態は一様でなく，確認面からの深さは15cm～42cmである。堆積土は自然流入したものとみられる。

主体部は周溝の中央部で検出された。遺存状況はきわめて悪く，南半は地山が露出している。平面形は南北に長い長方形をなし，短軸は北辺がいくぶん幅広い。方向は，発掘基準線に対し西へ33°振れている。規模は長軸が2.40ｍで，短軸は北辺が1.05ｍ，南辺が0.85ｍを計測する。壁ぎわは溝状に深くなっており，とくに短軸ではこれが顕著であった(北辺35cm，南辺21cm)。棺材を埋設する際の掘り方の痕跡と思われる。

遺物はまったく出土していない。

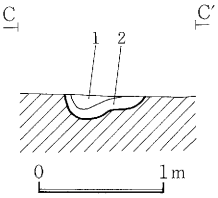
この周溝墓は，時期の決定が困難であるが，本遺跡ではかつて塩釜式の底部穿孔の土師器壺が出土しており，遺跡内には周溝墓もしくは小規模な古墳の存在が予想される。こういった観点に立てば，本遺構あるいは近接するＳＤ102・138円形周溝（第7・11次調査）は，古墳時代前期の墓である可能性をもっている。



層位	層No	土色	土質	備考
1	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
2	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やわらかく，しまりがない。
	3	オリーブ褐色(2.5Y 4/3)	シルト	
	4	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	5	褐色(10YR4/3)	シルト	
3	6	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	掘り方埋土。

層位	層No	土色	土質	備考
1	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
2	2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
3	4	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	掘り方埋土。

層位	層No	土色	土質	備考
1	1	にぶい黄褐色(10YR5/4)	シルト	
2	2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	やわらかく，しまりがない。
	3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
3	4	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	汚れている。



層位	層No	土色	土質	備考
1	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	やわらかく，しまりがない。
2	2	にぶい黄橙色(10YR6/4)	シルト	

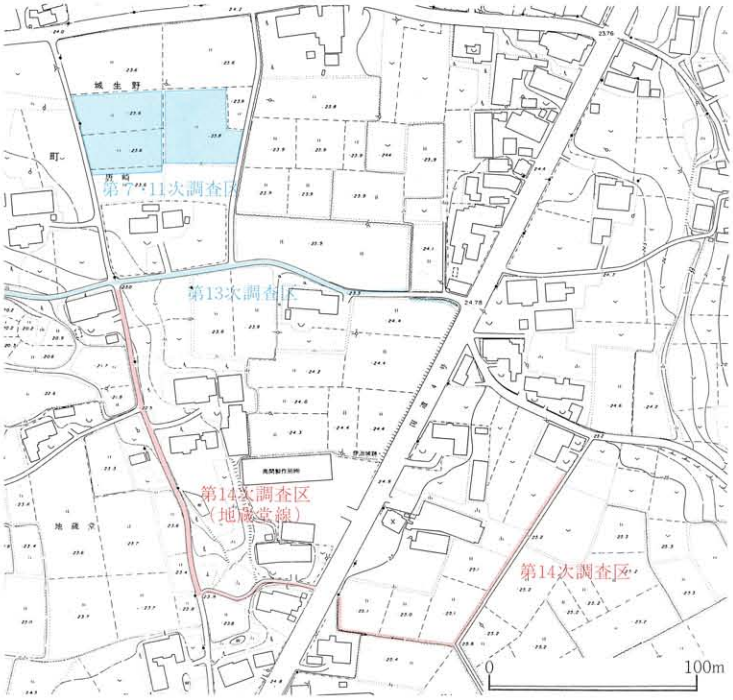
第37図　SX163円形周溝墓

第 14 次 調 査

調査地　城生野地蔵堂

面　積　170㎡

期　間　平成元年11月29日～12月８日



第38図　第14次調査区位置図

第13次調査を実施した田端前線では調査の進行状況にあわせて路線敷の西側から水道管の埋設工事を実施してきた。ところが第13次調査の結果，この農道の東半部は伊治城跡の主要な一画を横断していることが判明したため（本書），当教育委員会では町水道課と遺構の保存問題について協議を行った。その結果，遺構の保存を優先し，東半部については水道管の埋設場所を想定される区画の範囲外へ移動することで合意した。そこで田端前線のほぼ中央から南へ向かって走る農道地蔵堂線をあらたな埋設場所とし，ここで立合調査を実施することとなった。また，これとあわせて国道４号線の東側で施工された水道管埋設工事についても立合調査を実施した。

立合調査はまず前述した田端前線から開始した。この一帯は，西側から入り込む沢地の頂部付近に位置している。このため，表土下にはグライ化した緑灰色の砂層が厚く認められ，きわめて不安定な地盤であることが確認された。

ところでＳＤ103・132区画溝は，西辺が北辺に対していくぶん内側に振れて掘られていたが（第７・11次調査），これを90°の方向に延長すると，西辺はこの地盤の悪い場所へ入り込んでしまう。したがって，区画の設計にあたっては，この点を考慮したのであろう。

一方，国道をはさんだ東側では，表土下に厚いロームの堆積が認められ，３ヶ所で住居跡と思われる落ち込みが検出された。

Ⅵ　考　　察

本年度は伊治城跡内で計５件の発掘調査を実施した（第10～14次)。このうち国庫補助事業計画にもとづく第11次調査は，昨年度の第７次調査で検出していた区画溝のひろがりとその内部に配置された遺構群の把握を目的として実施した。その結果，二重の区画溝の内側に計画的に配置された建物群が検出され，この場所が伊治城跡のなかでも主要な一画であることが明らかとなった。以下ではこれに関連する第13次調査の成果と共に，若干の考察を行いたい。

１．各遺構の特徴と問題点

ａ）掘立柱建物跡

本年度の調査で発見された建物跡は，ＳＢ140・141・150・151・152の５棟である。このうち前二者は第11次調査区で検出され，後三者は第13次調査で検出された。

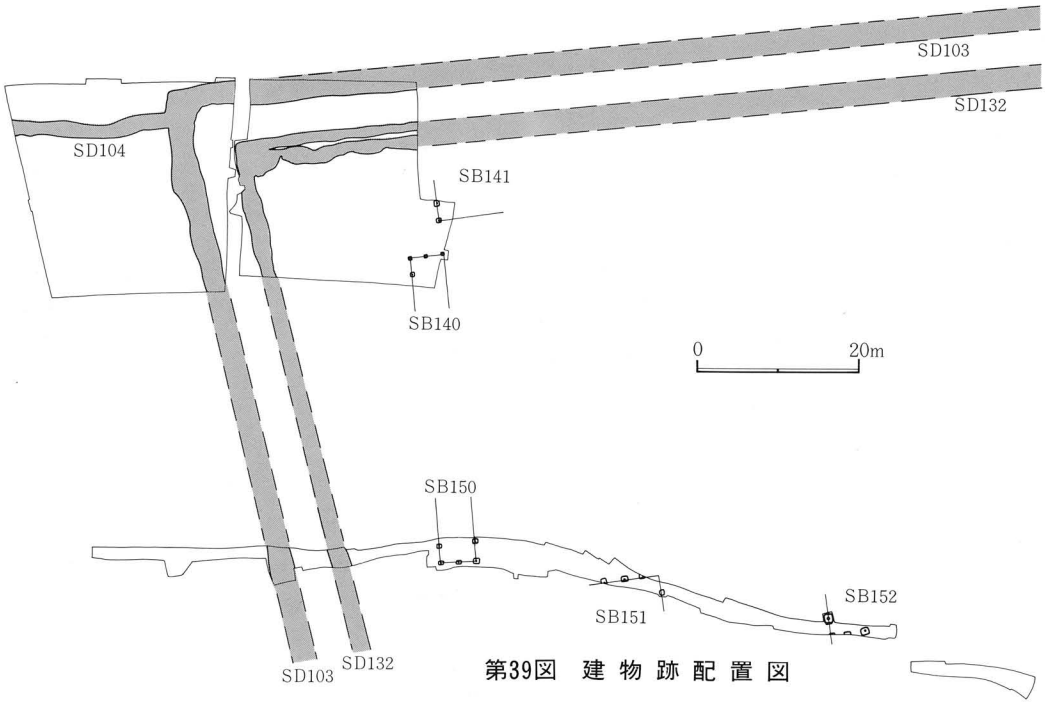
第２表　掘立柱建物跡一覧

遺構名	構造	規模		柱穴		柱痕跡	出土遺物	変遷	調査次数	重複
		桁行	梁行	平面形	規模					
ＳＢ140	南北棟	２間以上	２間	方形	0.7m～1.1m	20cm～34cm	無し	１時期	第11次	ＳＤ134･135･136溝と重複しており，これより古い。
ＳＢ141	東西棟	不明	２間以上	方形	0.9m～1.2m	24cm～30cm	無し	１時期	第11次	ＳＤ137溝に重複しており，これより古い。
ＳＢ150	南北棟	２間以上	２間	方形	0.8m～1.3m	25cm～32cm	無し	１時期	第13次	ＳＩ158住居跡と重複しており，これより古い。
ＳＢ151	不明	４間以上	×２間以上	方形	1.1m～1.3m	38cm～45cm	無し	１時期	第13次	ＳＸ163円形周溝墓と重複しており，これより新しい。
ＳＢ152	不明	２間以上		方形	1.6m～1.8m	48cm	平瓦	２時期	第13次	無し

これらの５棟の建物跡は，後述するＳＤ103・132溝に周囲を区画されるもので，この区画溝の北辺に建物方向をほぼあわせている。このうち第11次調査で検出されたＳＢ140・141建物跡は，東桁行と西梁行の柱筋をほぼそろえており，建物間の間隔もおおよそ20尺である。また，第13次調査で検出されたＳＢ150建物跡も，桁行の柱筋をこの２棟とほぼそろえている。このことから，この３棟の建物跡の配置には計画性が認められ，同時に存在したと考えられる。

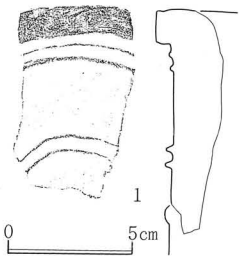
また，この他のＳＢ151・152建物跡についても，ほぼ同一の建物方向をとって設計されていることから，一連のものとみなされよう。ただし，ＳＢ152建物跡には２時期の変遷が認められ，他の建物跡とは様相を異にしている。また，第13次調査区では組み合わせ不明の柱穴が幾つか検出されており，これらがどういった建物跡になるのか，まだ判然としない。

年代については，ＳＢ150建物跡を切って構築されているＳＩ158住居跡の出土遺物から下限を求めることが可能である。この住居跡では，床面上から土師器坏・甕・須恵器坏の７点の完形品が出土している（第33図)。個別的にみて行くと，まず土師器坏（第33図4）は，口縁部と体部の境に軽い段をもち，また内面にも稜が認められる。器面調整は内・外面ともにミガキで，内面には黒色処理が施されている。こういった特徴を具えた坏は，氏家和典氏が設定した国分寺下層式（氏家：1961.3）に該当する。一方土師器甕は，製作にあたってロクロが使用された



第39図　建物跡配置図

もので，表杉ノ入式（氏家：1957.3）に該当する。このうち中型の２点（第33図１・２）は，体部下半に再調整を受けており，同型式のなかでも比較的に古い段階の要素を持っている。また，第33図3の小型甕は，色麻町上新田遺跡３号住居跡・宮崎町早風遺跡９号住居跡に類例があり，表杉ノ入式の初期に位置づけられる。さらに，須恵器坏（第33図６・７・８）は法量・器形にややばらつきはあるが，いずれもヘラ切り無調整で，これまでの類例からすれば国分寺下層式から表杉ノ入式初期に伴うものである。

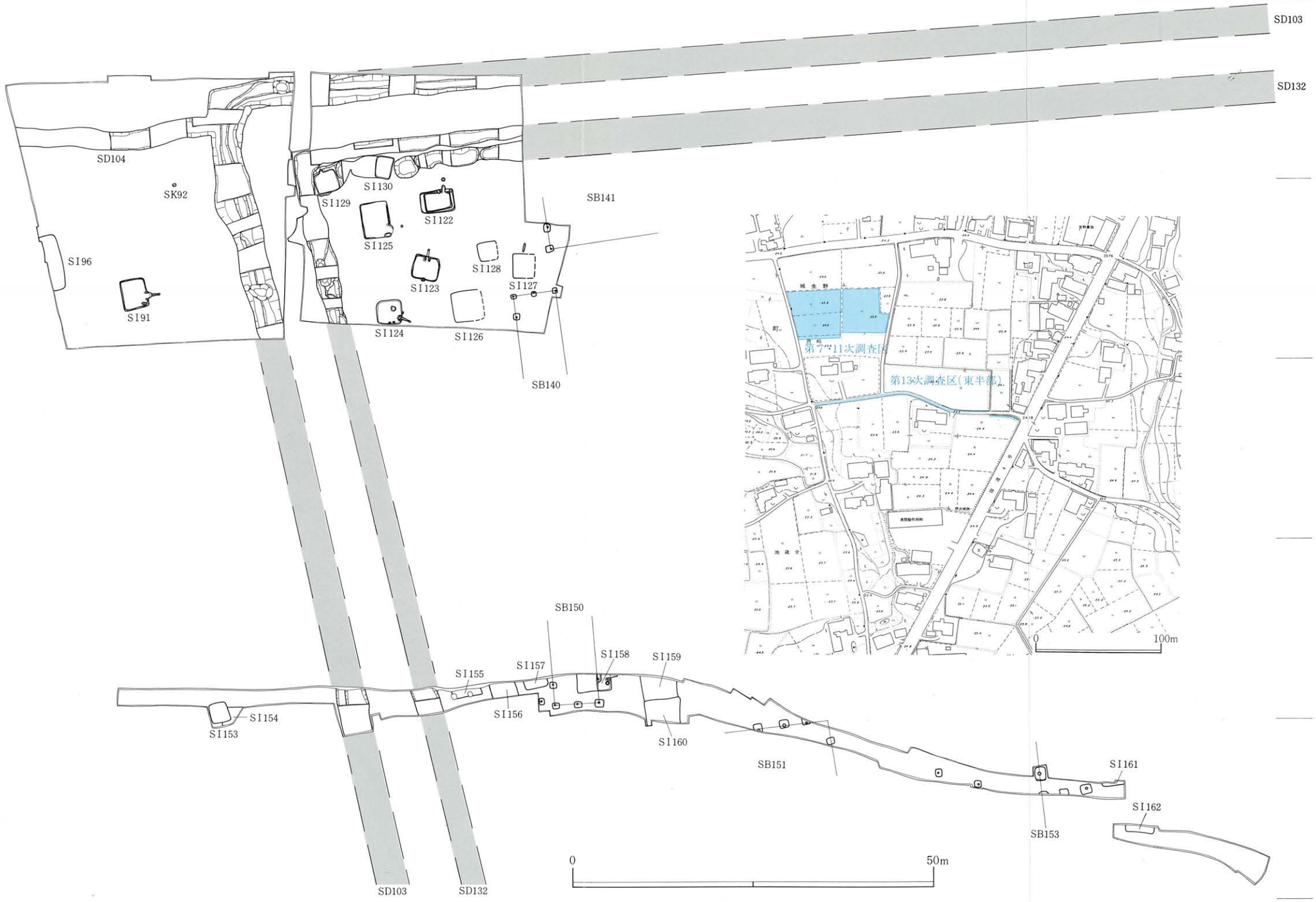


以上の検討から，この土器群には国分寺下層式から表杉ノ入式初期の特徴が認められ，実年代としてはおおよそ８世紀後半から９世紀初頭までの年代が与えられる。したがって，建物群は少なくとも９世紀の初頭には廃絶していたと考えられる。

No	種別	器種	出土遺構	層No	痕跡		登録No
					凹面	凸面	
1	瓦	軒丸瓦	ＳＫ168	1	剝落しており，不明。	細い隆線による重圏文。	Ｆ－３

第40図　SK168土壙出土重圏文軒丸瓦

なお，この一帯はこれまでの調査区に較べると瓦の分布が濃密で，ＳＢ152Ｂ建物跡の掘り方埋土からは，平瓦片が出土した（第29図)。また，ＳＫ168土壙からは，これまで採集品でしか発見されていなかった重圏文軒丸瓦が１点出土している(第40図)。こういった状況から，これらの建物群のなかには瓦葺きのものが存在した可能性がある。



第41図　第７・11・13次調査区遺構配置図

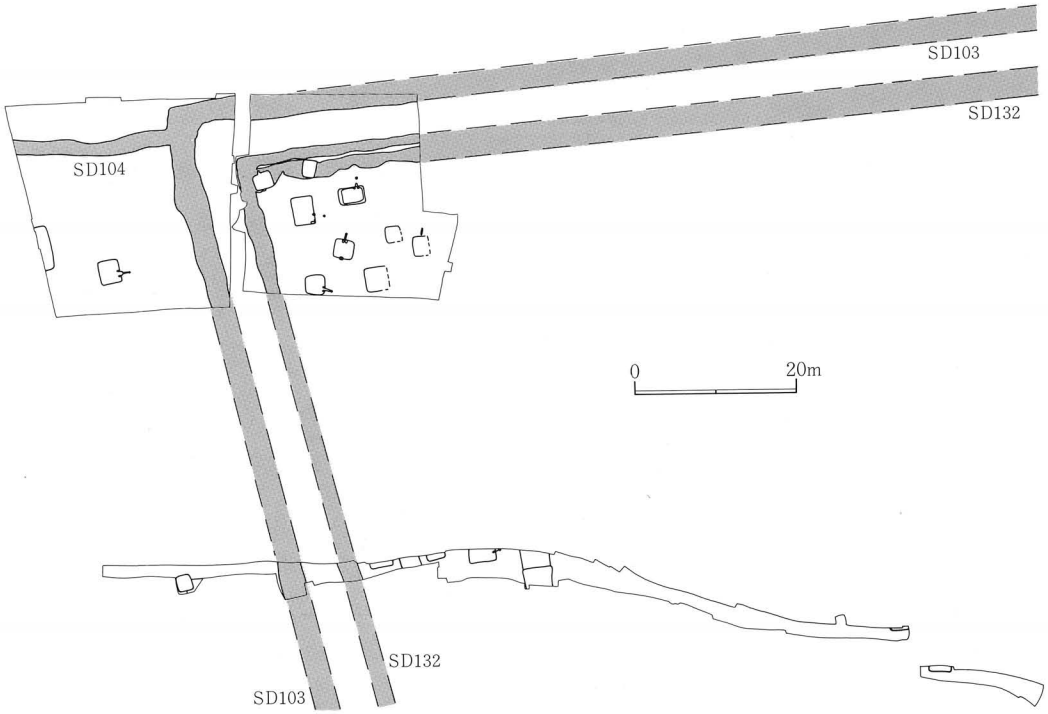
b）竪穴住居跡

竪穴住居跡は19棟検出された。これらは検出状況から，ＳＤ103・132区画溝の内側で検出された14棟，区画溝に重複する２棟，区画溝の外側で検出された４棟に大別される。方向は，大半が発掘基準線に対し南北方向で西に振れるもので，強い斉一性が認められる。

精査を実施した９棟の住居跡は出土遺物の年代観（８世紀後半～９世紀初頭）から，いずれも伊治城跡にかかわるものと考えられる。また，未精査の住居跡も遺構確認段階で出土した遺物から，同時期に営まれたものと予想される。

区画溝の内側に営まれた住居跡は，ＳＢ150建物跡を切って構築されているＳＩ158住居跡を除いて，建物群との具体的な前後関係のわかるものは無い。これらの住居跡が建物群と同時存在したとは思われないが，その位置づけについては，今後の課題である。また，建物群と相前後して重複する住居跡の調査例が増加すれば，伊治城跡における土器の細かな変遷をおさえることができる可能性もある。この点についても今後注意を払っておきたい。

区画溝と重複する２棟は，いずれもＳＤ138溝の新しい段階（ＳＤ138Ｂ）と重複している。これらは堆積土の状況から，区画溝の改修時に短期間営まれた遺構と推定される。性格として



第42図　竪穴住居跡分布図

は，区画溝のライン上に営まれていること，カマドの構造が本遺跡に一般的なものとは異なることから，区画施設の改修時に伴う工房のような性格を指摘しておきたい。

区画溝の外側に営まれた住居跡は，建物群との関係について知ることはできなかった。

c）溝

溝は2条検出された（ＳＤ103・132)。これらは前述の計画的に配置された建物群の周囲を二重に区画するものである。まだ北西のコーナーが確認されたのみであるが，おそらく方形の区画をなすと思われる。ともに2時期の変遷が認められた。規模は，検出された北西のコーナーから計測すると，北辺は外側のＳＤ103溝で41m，内側のＳＤ132溝で30m，西辺は外側のＳＤ103溝で82m，内側のＳＤ132溝で71m以上のひろがりをもつ。西辺は，地盤の悪い場所を避けるため，北辺に対して90°よりやや内側へ振って掘られている(註1)。

ＳＤ103溝は，新しい段階（ＳＤ103Ｂ）で上幅3.5m～5.0mを計測する。改修は古い段階の内側にやや重複して行われており，新しい溝の堆積土中には，灰白色火山灰（山田・庄子：1978.3）が認められる。出土遺物は大半がＳＤ103Ｂ溝からのもので，住居跡と同じく8世紀後半から9世紀初頭の年代幅のなかにおさまるものが出土している。

一方，ＳＤ132溝は，外側のＳＤ103溝に較べて規模が小さく，上幅は1.7m～2.0mを計測する。改修は古い段階の内側で行われており，西辺ではやや重複して，北辺ではわずかに隙間をおいて実施されている。出土遺物はSD132B溝に集中しており，内容はSD103B溝と同様である。

2．ま　と　め

本年度の調査の結果，第7・11・13次調査区を設定した場所は，計画的に建物群を配置し，その周囲を二重の溝で方形に区画していた場所と推定される。このことから，この一帯が伊治城跡のなかでもきわめて重要な一画であることは，確実であろう。以下ではその成果を簡単にまとめ，今後の指針としておきたい。

① 建物跡は5棟検出された。方向は区画溝の北辺にほぼあっており，このうちの3棟では柱筋をほぼそろえているのが確認された。このなかには瓦葺きの建物跡も存在したと推定される。

② 建物跡の周囲を巡る二重の溝は，方形の区画をなすと思われる。本年度の調査では北西のコーナーが検出され，外側の溝で北辺が41m，西辺が82mまで確認された。

③ この一画は，出土遺物の検討から，8世紀後半から9世紀初頭までの比較的短期間に機能していたと考えられる。

以上の調査成果をもとに，この場所の性格を考えると，伊治城の政庁跡とみるのが最も妥当であろう。しかし，今回の調査は断片的なもので，想定されるこの一画の大部分はまだ未調査域

として残されている。今後は，早急に区画全体の範囲を把え，建物群の配置関係や細かな変遷などを解明して行かなければならない。

築館町では来年度からこの一画を５ヶ年計画で発掘調査して行く予定である。こういった問題点は，今後の調査成果の蓄積を待って十分な検討を加えて行くことにしたい。

註１)：北辺がこの一画の基本的な区画の方向であることは，内部に配置された建物群の方向が，これにあわせて設計されていることからも明らかである。

参考・引用文献

加藤・伊藤（1955.3）　「宮城県登米郡新田村字対島竪穴住居址群」『登米郡新田村史』

氏家　和典（1957.3）　「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

氏家　和典（1961.3）　「土器」『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』宮城県教育委員会

山道・三浦・成田　『近野遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書　第22集　青森県教育委員会

小井川・高橋（1977.12）　「宮城県対島遺跡出土の土器」『宮城史学』第５号

宮城県多賀城跡調査研究所（1978.3）　『伊治城跡Ⅰ』多賀城関連跡発掘調査報告書第３冊　宮城県多賀城跡調査研究所

小井川・手塚（1978.3）　「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報』　宮城県文化財報告書第53集　宮城県教育委員会

宮城県多賀城跡調査研究所（1979.3）　『伊治城跡Ⅱ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書４冊　宮城県多賀城跡調査研究所

山田・庄子（1980.3）　「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『宮城県多賀城跡調査研究所年報1979―昭和54年度発掘調査概報―』宮城県多賀城跡調査研究所

宮城県多賀城跡調査研究所（1980.3）　『伊治城跡Ⅲ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第５冊　宮城県多賀城跡調査研究所

小井川和夫（1981.3）　「上新田遺跡」『長者原貝塚・上新田遺跡』宮城県文化財調査報告書第78集　宮城県教育委員会

手塚　　均（1981.3）　「鶴ノ丸遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第81集　宮城県教育委員会

丹羽・阿部・小野寺（1981.3）　「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集　宮城県教育委員会

森　　貢喜（1980.3）　『早風遺跡発掘調査報告書』宮城県宮崎町文化財調査報告書第３集　宮崎町教育委員会

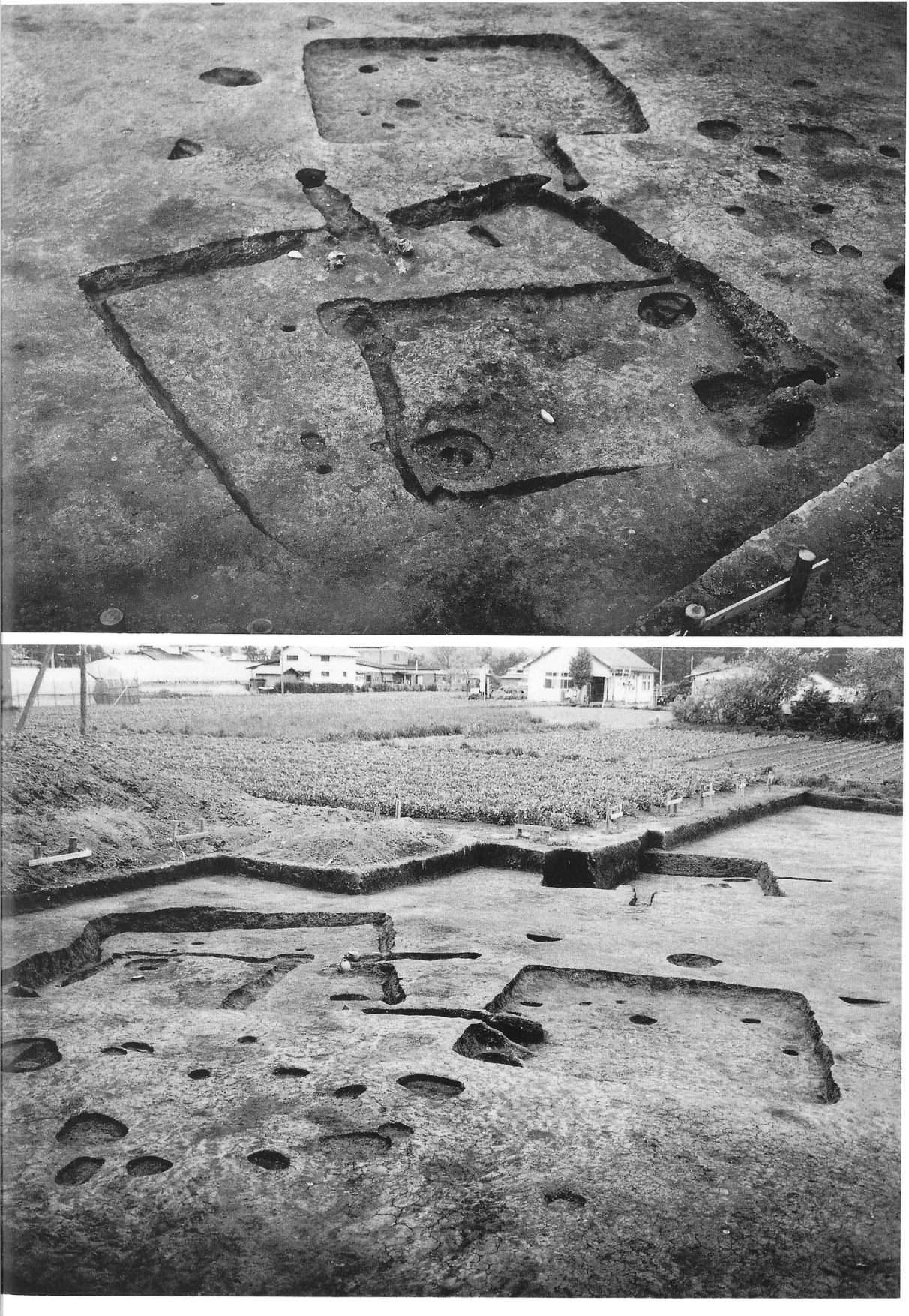
丹羽　　茂（1985.3）　「今熊野遺跡」『今熊野遺跡・一本杉遺跡・馬越石塚』宮城県文化財調査報告書第104集　宮城県教育委員会

高橋　守克（1987.3）　『須恵糠塚遺跡』河南町文化財調査報告書第１集　河南町教育委員会

築館町教育委員会（1988.3）　『伊治城跡―昭和62年度発掘調査概要―』築館町文化財調査報告書第１集　築館町教育委員会

築館町教育委員会（1989.3）　『伊治城跡―昭和63年度発掘調査概報―』築館町文化財調査報告書第２集　築館町教育委員会

写　真　図　版

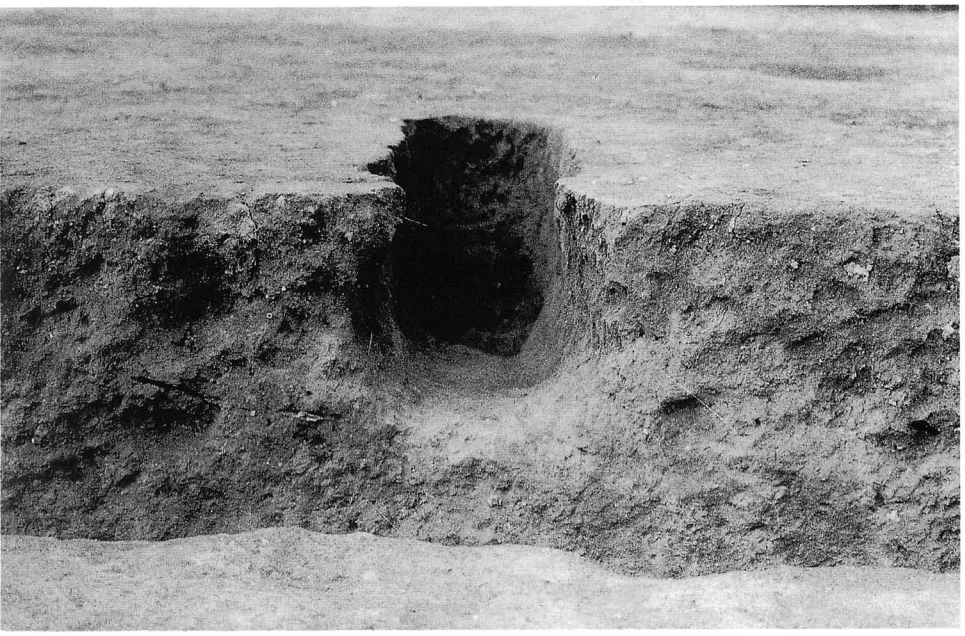


図版１（第10次調査区）

上：ＳＩ113・114・115住居跡（南から）
下：ＳＩ113・114・115住居跡（東から）

図版２（第10次調査）

ＳＩ112住居跡（北西から）



ＳＩ112A住居跡カマド
（南から）

ＳＩ112B住居跡カマド
（西から）

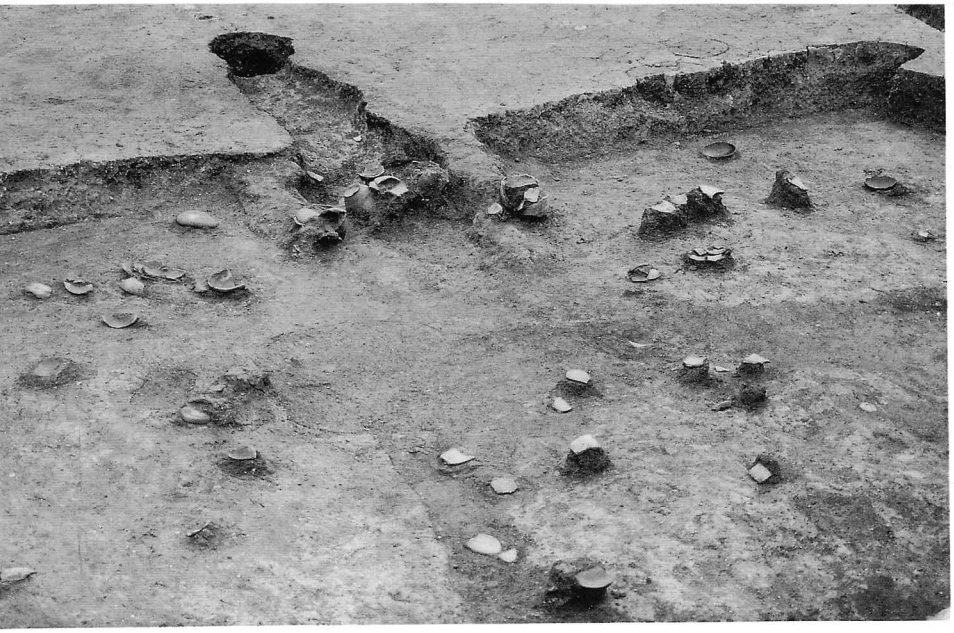
図版３（第10次調査）

ＳＩ122Ｂ住居跡
床面遺物出土状況

ＳＩ113住居跡（南から）

ＳＩ113住居跡
床面遺物出土状況（北西から）

図版４（第10次調査）



ＳＩ114住居跡
床面遺物出土状況
（南西から）

ＳＩ114住居跡
カマド遺物出土状況
（南から）

ＳＩ114住居跡
床面遺物出土状況
（西から）

図版５（第10次調査）

ＳＩ114住居跡
床面遺物出土状況（西から）

ＳＩ114住居跡
床面遺物出土状況（西から）

ＳＩ115住居跡
カマド付近遺物出土状況（北西から）

図版６（第11次調査）

第11次調査区全景（西から）

図版７（第11次調査）

上：SD132溝（東から）

下：SD103溝（西から）

図版 8 （第11次調査）

第11次調査区南東隅
SB140・141建物跡（南西から）

図版 9 （第11次調査）

上：SB140建物跡（南西から）
下：SB141建物跡（南東から）

図版10（第11次調査）

ＳＩ123住居跡（南から）

ＳＩ123住居跡
第３層上面遺物出土状況
（南から）

ＳＩ123住居跡
円面硯出土状況（南から）

図版11（第11次調査）

ＳＩ122住居跡（南から）

ＳＩ129住居跡（西から）

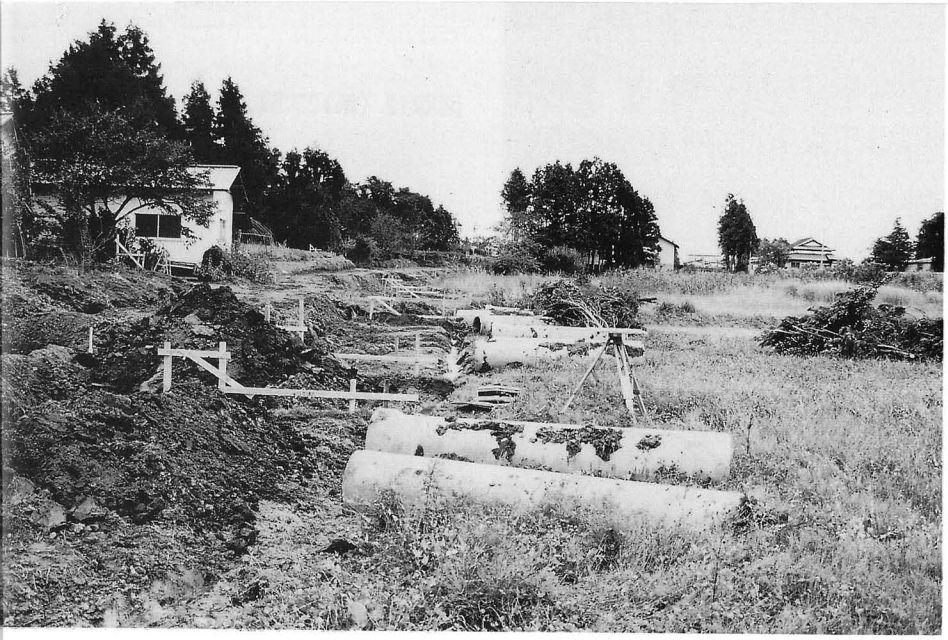
ＳＩ130住居跡（南から）

図版12（第12次調査）

上：古墳時代前期溝遺物
出土状況（北から）

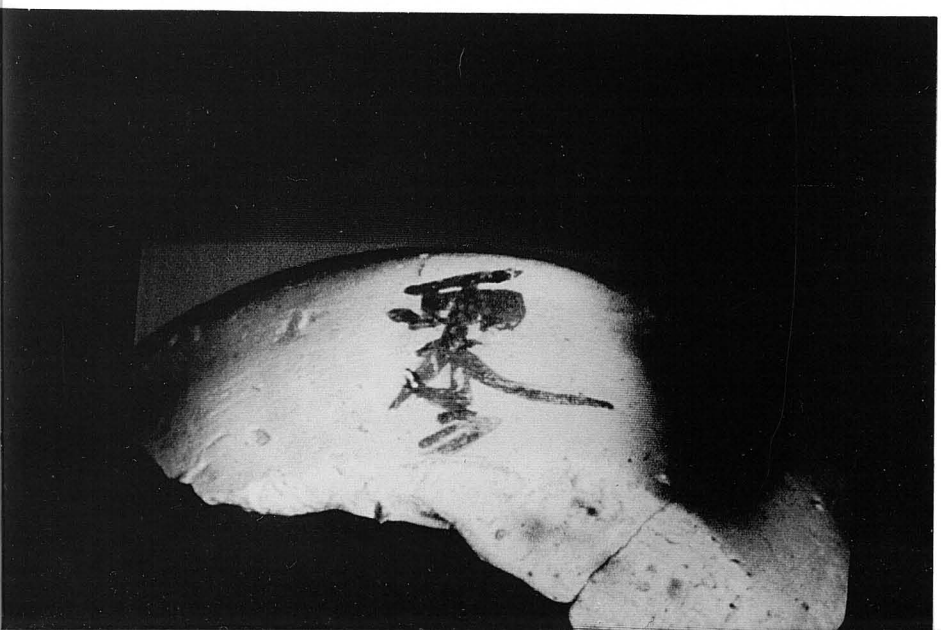
下：古墳時代前期溝全景
（南西から）

図版13（第13次調査）

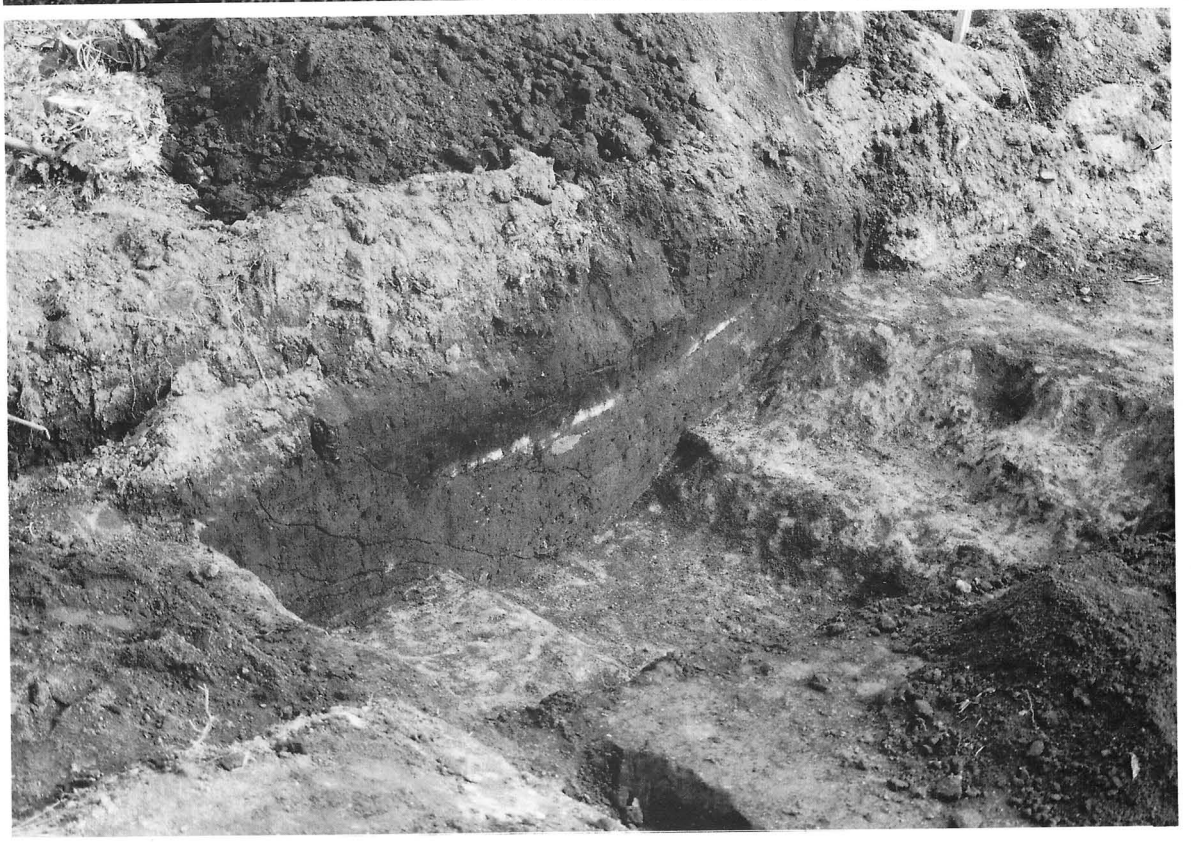


西半部遠景(西から)

西半部遺構外出土
墨書土器「厨」



西半部遺構外出土
墨書土器「栗□」



図版14（第13次調査）

上：SD103・132溝検出状況（南東から）
下：SD103溝（南西から）

図版15（第13次調査）

上：SB150建物跡（東から）
下：SB150建物跡P_5検出状況

図版16（第13次調査）

上：SB151建物跡（東から）
下：SB152建物跡（西から）

図版17（第13次調査）

ＳＩ158住居跡
床面遺物出土状況（南西から）

ＳＸ163円形周溝墓（南東から）

SD165・167溝（東から）

築館町文化財調査報告書　第３集

伊　治　城　跡

—平成元年度発掘調査概報—

印　刷　平成２年３月20日
発　行　平成２年３月31日

発　行　築　館　町　教　育　委　員　会
宮城県栗原郡築館町薬師三丁目6-1

印　刷　南　部　屋　印　刷　株　式　会　社
宮城県栗原郡築館町高田一丁目7-36